

銀河英雄伝説異伝～
ジークフリード・キル
ヒアイスの辺境戦記～

ほうこうおんち

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゴールデンバウム朝銀河帝国を二分したりっつぷシユタツト戦役。

その中で、キフオイザー星域会戦とガルミツシユ要塞攻略しか語られない、辺境におけるキルヒアイス上級大将の活躍。

しかし辺境では60度に及ぶ戦いがあり、キルヒアイス軍はこれらに悉く勝利して来た。

ローエンングラム侯ラインハルトとの合流に至る約5ヶ月を描く、原作の補完する物語である。

とは言え、戦闘描写よりはラインハルトと離れ、独自行動をするキルヒアイスの描写

や、銀河帝国の貴族構造についての解説メインとなる。
戦闘描写では、オリジナルの貴族を多数登場させる。

目次

キルヒアイス別動隊出撃

1

最初の寄港地

12

辺境領占領戦略

25

民との戦い

37

辺境貴族の反撃

51

見えない敵

62

非対象戦争

75

老提督の限界

86

辺境の大貴族

99

ヤルンヴィド星域会戦

110

キフオイザー星域会戦

123

ガルミツシユ要塞攻略戦

138

ヴェスタラント

最終回：悲劇の再会へ

164 151

キルヒアイス別動隊出撃

「それでは頼むぞ」

銀河帝国を二分する内乱、後に「リップシユタット戦役」と呼ばれる貴族連合軍対リヒテンラーデ・ローエングラム枢軸軍において、ローエングラム侯ラインハルトは赤毛の腹心にそう言った。

ジークフリード・キルヒアイス上級大将、年齢21歳、190cmを超す長身の青年は、これで宇宙艦隊副司令長官である。

ローエングラム侯ともども若く、貴族たちからは「孺子（こぞう）」と呼ばれている。この若い提督は、40000隻の艦隊と二人の中将を預かって、銀河帝国辺境制圧に赴く。

ゴールデンバウム朝銀河帝国は、銀河連邦を乗っ取る形で建国された。

初期の領域は、現在の領域よりも小さい。

銀河帝国には二度の領域拡大期があり、それに寄与したのが貴族たちで、拡大された領域「辺境」とは首都における権勢と共に貴族を支える重要なものであった。

銀河帝国初代皇帝ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムは、有能と認められた者に爵位と特権を与え、貴族社会を作り上げた。

もちろん、ただ特権だけを与えたのではない。

義務として貴族たちは、当時の辺境星域の開発を命じられた。

不便だから辺境である。

人は便利な惑星に住みたがり、不便な地域には寄り付かない。

自由に任せればそうなってしまう。

貴族に任じられた者は、不便な辺境を開拓する事で「不輸入の権」、即ち「税を収めず、官憲の立ち入りを拒める」荘園を手に出した。

荘園といっても中世のような農園ではない。

資源採掘、航路の通行権、商業上の立ち入り料等近代的ビジネスで得られる利益を独占出来るのだ。

貴族たちは競って開拓権を求め、荘園を増やしていった。

そう言うのと貴族が汗水流して努力したように聞こえるが、実際にやったのは資金の移動だけである。

開拓権購入、これは貴族の義務であり、帝国の収入源となる。

貴族は、元々大資本家や企業家が任じられたりした為、これを支払う。

支払った以上元は取る。

自分の手足となる業者を探し、彼等に資金を渡して辺境を開発させる。

荘園は貴族の自由になる地であり、そこでの独占権も餌にして業者を使う。

こうして帝国、貴族、特権業者という流れで資金が辺境に投入され、富を産みだす星に改造された。

ルドルフが見込んだ者たちは、確かに有能だった。

不便だからと顧みられなかった地域が、今や帝国の経済を押し上げる重要な地へと変わった。

ブラウンシュヴアイク、リッテンハイム、カストロプ、クロプシュトックと言った大貴族は、この時に優良な荘園と莫大な富と、帝国に貢献した功から更なる特権を与えられた者たちであった。

こうして辺境は辺境で無くなる。

貴族も代替わりし、生まれながらに特権を持った者が大人になると、やがて銀河連邦時代と同じになった。

「もう十分開発したし、その外になんて行きたくない、リスクの方が高い」という気分となった。

安価な労働力である「共和主義者」の矯正奴隷も得られなくなった。

大貴族たちに領土拡大をする意思は無くなっていた。

その時、彼等に代わって開発を受け持つ者たちが現れる。

貴族の三男、四男たち、または庶子、所謂「冷や飯食い」の子供たちである。

領土は拡大せずとも、経済発展して利用可能な地域が拡大している内は、子供は何人居ようが良かった。

新領域を預け、帝国の典礼省に頼んで家名と爵位を貰い、自家の派閥（門閥）拡大に使えた。

だが、新領域拡大が頭打ちとなると、長男と次男くらいは何とかなるが、それ以下の子は親や兄から小遣いを貰って遊び暮らす「厄介者」になる他ない。

この時期に貴族の子弟出身の芸術家や学者が増えたので、一部の「厄介者」はそちらの分野で家名を高める。

そのどちらでも無い者が境界の開発をし、その功をもって新たな爵位を得た。

この謂わば「辺境伯」とも言える貴族分家は、本家に収益の一部を渡す事で、中央復帰の足掛かりを掴んだ。

本家は不労所得を増やし、代わりに権力で庇護し、一門の者として中央社交界デビューをさせた。

この「辺境貴族」は宇宙海賊だけでなく、先のその惑星に入植していた叛徒・共和主

義者の組織や、時には同じ辺境貴族と戦う事もあり、武力を強化していく。

余り大きな戦いとなれば帝国政府を刺激し、自らが討伐の対象となりかねない。

故に問題を大きくする前に、本家の貴族を頼り、政治的決着を図る。

だが時に、その本家同士が不倶戴天の敵であった場合、代理戦争の道具ともされる。

こうして戦争と身近な辺境貴族は、中央の貴族本家よりもリリストが多い。

本家の伝手を使い、幼年学校から士官学校を経て、軍務に就く事で自領を守る軍才を磨く者も多い。

ラインハルトやキルヒアイスの周囲にもそういう貴族の子弟はいた。

こうした貴族の不遇な子弟による領土拡大も一段落する。

拡大するだけでなく、内実を充実させる時期が来たからである。

その一方で、どの時代にも冒険主義者は居て、危険宙域を踏破し、未知の惑星を探す行動は続いていた。

帝国暦331年、冒険的領土拡大は変化を迎える。

今は断絶した貴族イゼルローン伯爵が、オリオン腕からより銀河中心に近いサジタリウス腕へ行く事が出来る、狭く長大な回廊を発見した。

彼の家名に因みイゼルローン回廊と名付けられたその先に、もしかしたら未知の文明国家があるかもしれない。

更にサジタリウス腕は危険宙域が多く、冒険的貴族イゼルローン伯もイゼルローン回廊から6光年の赤色巨星アルトミユールで、不意の恒星爆発の影響を受けて事故死した。

この先の調査は軍に一任される。

軍は、イゼルローン回廊の先に叛徒・共和主義者の組織を確認。

最近聞かなくなったその名前だったが、ある意味「まだ居たのか」と慣れた感じで討伐軍を派遣する。

これが大敗に終わる。

これまで辺境に潜んでいた隠れ家的な組織と異なり、国家である事が判明。

しかし通例に倣い、この自由惑星同盟を自称する組織を帝国では「辺境の共和主義勢力」と呼んだ。

それでも脅威を実際には認識していた為、同盟軍に大敗したダゴン星域会戦以降の領土拡大は、軍が行った。

遅れていた開発の艇入れでもなく、門閥貴族の子弟による莊園拡大でもなく、この一帯の領域を知らねば外敵に後れを取るといふ防衛上の理由からであった。

そうして拡がった銀河帝国領だが、軍事基地だけで賄える程に帝国の財政は豊かでない。

この頃、貴族領の多さによって中央政府の税収は伸び悩んでいた。

その上、「敗軍帝」フリードリヒ2世後の帝位は、皇子たちによる毒殺や陰謀で混乱し、「再建帝」マクシミリアン・ヨーゼフ2世も毒によって視力を失う有り様であった。

このマクシミリアン・ヨーゼフ2世が、軍事的に重要な拠点以外の新辺境領を門閥貴族たちに開発させる。

この遠く、いつ戦火に巻き込まれるかも知れず、危険宙域の多い辺境に送られるのは、その貴族の一門の中でも立場が弱い者たちであった。

自ら自領を開発した「辺境貴族」と違い、この「委任貴族」はやる気が無い。

そこで、財力だけはそれなりにある商人や銀行家等が「委任貴族」の手足となって働く事で大収入を得る時代が訪れた。

「門閥」に属さない彼等に爵位は授与されず、「帝国騎士」号が乱発される。

こうして軍事的重要な拠点以外の新辺境で一儲けした者の大なる者は、フェザン回廊を発見し、その地を自治領とする事を認めさせたレオポルド・ラープから、ラインハルトの祖父にあたるアルブレヒト・フォン・ミュゼル、ロイエンター大將の父親等が居た。

このように辺境とは、帝国のもう一個の顔であり、様々な種類の貴族権益が入り交ざる場所であり、体積的には基本となった旧銀河連邦領の3倍に及ぶ広大な領域であつ

た。

この広大な領域の制圧を、ジークフリード・キルヒアイスが任されたのは、それなりの理由も有った。

ゴールデンバウム朝銀河帝国の貴族は、断絶したものを除いてまだ4000家以上存在する。

この内、3740家がリップシユタット盟約、即ち門閥貴族連合軍に与した。彼等は叩き潰す。

その他400家を超える貴族の内、帝国宰相リヒテンラーデ公には宮廷の官僚貴族100家程が味方についた。

ラインハルトに味方したと言えるのは、マリィンドルフ伯爵、キュンメル男爵、シャフハウゼン子爵、ヴェストパーレ男爵、コルヴィッツ子爵といった二十家程で、勢力の内に入らない。

しかもほとんどがマリィンドルフ家か、ラインハルトの姉アンネローゼの縁者である。

そして200家以上が中立を守っていた。

彼等のほとんどは、帝都オーデインにあるブラウンシユヴァイク公の莊園リップシユ

タツトの森に参集も出来ず、それ以上に門閥貴族の力をあてにせず、独立独歩で来た者であった。

技術が発展し、直接統治出来る領域は大幅に拡大したが、それでも手に余る領域、自治に任せた方が良い領域も存在する。

ラインハルトは共和主義者では無い。

全貴族を滅亡させ、全ての地を人民に返す、という理想という名の幻想を抱いてはいない。

民衆は遙か昔に、自分たちで政治をする権利を返上した。

今も別に返して貰いたい訳ではない。

彼等は、「名君」に支配される事を望んでいる。

ラインハルトは名君となる自信は有るが、別に彼以外が名君であるならそれはそれで良い。

辺境の領主の内、領民が慕う貴族も居るかもしれない。

リップシュタツト盟約に加わり、明確にラインハルトに敵対していながらも、領地の統治では名君も居るかもしれない。

そういう領主を見極める政治的な役割を、ラインハルトはキルヒアイスに求めた。

「俺は採点が辛過ぎる。」

貴族の中で、これらと思ったのは、マリィンドルフ家の令嬢しか会った事がない」

「ヴェストパーレ男爵夫人は如何でしょう？」

「……とにかく俺は、貴族を見る目が厳し過ぎるのを自分で自覚している」

(話を逸らすとは、ラインハルト様、忘れていたようですね)

「その点、お前は見る目が公平だ。」

俺と同じ様に貴族社会を憎む一方で、ごみ溜めの中にも美点を見出し出す優しさがあ
る。

お前の判断で、残して良い貴族が居るか、見定めてくれ」

実際、キルヒアイスの方が貴族を正しく判断している。

ラインハルトが苦手意識を持ったグリーンメルスハウゼン子爵や、「強者による支配を
受容している」と酷評したライフアイゼン大佐、「アルレスハイム会戦の敗残者」カイ
ザーリング男爵と言った貴族についても、キルヒアイスは外聞だけで判断せずに内面ま
で見ている。

一方で有能ではあってもリユーネブルク少将は危険視する等、単に甘いだけではな
い。

ラインハルトはキルヒアイスの観察眼を信頼していた。

速やかに主要領域の3倍の領域を制圧し、かつ人民を救済しつつ、貴族領主の採点も

する。

このような役目はキルヒアイスにしか任せられない。

かくしてキルヒアイスは「もう一人のラインハルト」として、また「辺境の監察官」として主力部隊を離れ、辺境に赴く。

最初の寄港地

ジークフリード・キルヒアイス上級大将率いる4万隻の艦隊は、ハーゼ男爵の荘園惑星に到達した。

この地の領主ハーゼ男爵は、ラインハルト・フォン・ローエングラム侯爵の姉グリューネワルト伯爵夫人の関係者であるが、そうなったのはとある事件からである。

かつて17歳のラインハルト・フォン・ミューゼル大佐とキルヒアイス大尉が憲兵隊に出向していた時、幼年学校で殺人事件が起きた。

最上級生のカール・フォン・ライファイゼンという生徒が食糧倉庫で死亡したのだ。

倉庫は施錠がされ、凶器も発見されない。

殺人事件と断定され、たまたまラインハルトとキルヒアイスが捜査担当となった。

捜査が進まぬ内に、学年次席のヨハン・ゴットホルプ・フォン・ベルツが殺害される。

この時、緑色のタイルに大量の血痕が遺されていた。

ふとした事から学年首席モーリッツ・フォン・ハーゼが赤緑色盲である事に気づくラインハルトとキルヒアイス。

銀河帝国において、遺伝病は悪とされ、色盲を含む遺伝病は「消滅」させられた。幼年学校に遺伝病疾患者が入学したとあれば問題である。

その事を知られ、脅されたハーゼが秘密を守る為、逆に脅迫者を殺した……

……という筋書きにラインハルトとキルヒアイスは納得しなかった。

不自然に、そう思いつくよう誘導されている感覚を覚えたからである。

そしてラインハルトは、伝説の探偵・服部平次のような推理力で、事件の真相に辿り着く。

最初のライフアイゼンの死亡は事故だった。

だが、事故と報告すると校長が管理責任を問われる。

そこで殺人事件に偽装した校長は、これを利用して事を思いつく。

学年次席のベルツを首席のハーゼが殺した事にし、全ての責任をハーゼにかぶせて追放する。

そうすると、苗字違いの孫・学年3位のエーリツヒ・フォン・ヴァルブルクが首席に躍り出る。

そう企んだゲアハルト・フォン・シュテーター校長は、ハーゼが赤緑色盲である事を知っていて入学させた。

ハーゼの祖父はシュテーター校長のかつての上官で、彼は逆らえなかった。

「そんな上官の『理不尽』、軍隊の『理不尽』、社会の『理不尽』に耐えて、ようやくここまで来た儂の気持ちだが、貴様に分かるか！

儂は娘の夫に夢を託したが、その婿も戦死させられた。

儂は彼の夢をも併せて、孫の為に邪魔者を取り除いてやったのだ。

そのどこが悪いのだ！」

結局シユテীগー校長の犯行が明らかになり、3位のヴァルブルクも退学せざるを得ないだろう。

学年首席、次席、3位を同時に失うその学年の生徒だったが、彼等はハーゼを

「怪しい奴だと思った」

「凶々しい」

「まさか遺伝病だったとはな」

と罵った。

その時ラインハルトが吠えた。

「やめろ！」

ハーゼが色盲だからといって彼を軽蔑する理由になるのか！

遺伝による体質や特質はそれを持つ者の責任か！

そんなことに関わりなく、ハーゼは学年首席だった筈だ！

それは彼の努力によって得たものだ！

貴様らは誰もその彼に敵わなかったではないか！

それでもハーゼを差別し貶めることが出来るというのか！」

ハーゼ一族はこの一件で全てを失う筈だった。

だが、ラインハルトの「寛大な処置を願う」という嘆願書が、彼の忌み嫌う皇帝フリードリヒ4世の目に留まる。

皇帝は、外野から見れば実に甘く事なかれ主義で、不公平な処分を下す。

ハーゼ子爵家は一階級家格を下げられ、男爵とされた。

そして所領の九割を没収される。

没収した領地を、皇帝は寵姫グリューネワルト伯爵夫人アンネローゼに与える。

アンネローゼはその領地の管理をハーゼ男爵家に全権委任した。

そして幼年学校を退学となったモーリッツ・フォン・ハーゼは、帝都追放と強制施設入所を命じられる。

その施設は、グリューネワルト伯爵領、つまりハーゼ家の旧領にある山荘とされた。

「まったく、皇帝陛下は下賤な女に所領をお与えになるとは」

「遺伝病の家系等は断絶させて然るべきを、生温い」

このように大貴族たちは批難する。

モーリッツの祖父、シュテーター校長の上官だったアルブレヒト・フォン・ハーゼ退役大將は、罰せられて退役後に二階級降等という処分を受ける。

アルブレヒトは

「こんな恥を受けたのも、あの金髪の孺子が孫の赤緑色盲を明らかにしたからだ」

とラインハルトを憎む。

ラインハルトは、シュテーター校長のトリックを明らかにする為と、黙っていても軍法会議でシュテーターがバラすと予想し、自ら先に触れる事で「寛大な処置を」願い出る事にしたのだ。

そういう心遣いを理解せず、アルブレヒトは自家の恥を晒したラインハルトを憎む。

モーリッツの父親、軍務省に勤めていたトマス・フォン・ハーゼ准将も、一階級降等の上退官を迫られ、辞表を提出した。

トマスは現当主のアルブレヒトと違い、この程度の処分ですんだ事を奇跡だと感じていた。

そしてそれが、グリューネワルト伯爵夫人の計らいであると知り、アンネローゼに深く感謝する。

ハーゼ家の所領の九割以上は辺境にある惑星ブラオハーゼであり、一割に満たない分

が帝都オーデインにある邸宅や農園である。

ハーゼ家はオーデインに住んでいたが、このような経緯からリップシュタットの森には招待されなかった。

恥辱に感じたアルブレヒトは、トマスを伴い元所領の惑星ブラオハーゼに下り、その守備兵力を伴ってブラウンシュヴァイク公に合流しようとする。

それを止めたのが、山荘に軟禁されていた筈のモーリッツ・フォン・ハーゼだった。「何をしに来た、我が家の恥さらしめ。」

貴様はその身が恥であると自覚し、引きこもっておれ！」
祖父の罵倒を無視し、モーリッツは一族を説く。

彼の脳裏には、かつてラインハルトがシュテーターを叱責した言葉がこびりついていた。

「そもそも色盲など本人に何も責任の無い事で最優等生のハーゼが学校を追われるような、そんな理不尽な法を強いる強者に対してこそ闘争を挑むべきなのに、なぜ強者に挑戦せず、力を弱きに向けるのか!？」

モーリッツは、そもそも世の中をつまらない物と考えていた。

ただただ相手が望む事を話していれば、余計な事に巻き込まれなくて済む。

そういうミスを恐れる生き方だったのだが、変わった。

ここで変わらねば意味がない。

ここで世を変えねば意味がない。

劣悪遺伝子排除法により、「処分」されて仕方ない自分が生かされている。

これは生きて、世を変える、それは弱者が虐げられない世を作る為だ。

「世迷言を。」

金髪の孺子にそのような力が有る訳も無い。

あれは、ただ皇帝陛下が姉に誑かされ、鼻屑したから帝室でも無いのに異例の出世をした、それまでの男よ」

「ではお祖父上にお聞きします。

同盟を僭称する反乱軍も、ミューゼル、ではなくローエングラム侯に気を使って敗北をしたのですか？」

「それは反乱軍が無能だからじゃ」

「では、その無能な反乱軍にイゼルローン要塞を落とされた帝国軍は如何に？」

「……………黙れ、目上の者に口答えするな、この半端者！

赤いか緑かまともに物が見える目になってから物を申せ」

「私には見えますよ。」

緑の森（グリューネワルト）の恩寵と、血の赤に染まる貴族社会の末路が。

お祖父上には見えないのですか？」

「そんなものが見えてたまるか！」

「一族の皆さまも考えて下さい。」

兵力だけで考えたら先年の反乱軍の侵攻に我々は屈していました。

だが実際にはどうでしょう？

反乱軍が無能だと言うなら、それはそれで良いです。

今、問題なのはブラウンシュヴァイク公とリッテンハイム侯が、ローエングラム侯より有能か無能かです。

答えは各自が出して下さい。

私が一言申すなら、ハーゼ家を見捨てたブラウンシュヴァイク公にもリッテンハイム侯にも義理立てする必要は無いという事です」

「黙れ、誰かこの半端者をどこかに連れて行け！」

「父上こそお黙りなされ！」

祖父と孫の言い合いに、父親が割って入った。

「お前も農に逆らうか！」

そう怒鳴るアルブレヒトを見無視し、トマスは息子に聞く。

「モーリッツ、幼年学校で首席だった私の誇りよ、お前は思う？」

お前もローエングラム侯ことミューゼル大佐に秘密を暴露された恨みが有るのではないのか？」

「最初は恨みました。

私が生き永らえた後も、単に偽善かと思つていました。

ですが、恐らく彼は言つた事を実現します。

私はイゼルローン要塞を無血で落とす策を思いつきません。

私が反乱軍の、何とか言う男と戦えば敗れるでしょう。

ですが、ローエングラム侯はその男を退け、帝国領から叩き出した。

きつとあの人は、世を変えてくれる」

「誰か、この馬鹿を捕まえて処分しろ！」

目だけでなく頭もおかしくなりおつた！」

相変わらずの祖父の喚き声に対し、一族の者は考える。

彼等も赤緑色盲の事は知らなかつた。

それを知つてからはモーリッツを馬鹿にして、恨んで来たが、ある時期まではモー

リッツを一族で一番出世する「希望」と見ていたのだ。

それ程にモーリッツの頭脳は優れていた。

その彼が「勝てない」と言う同盟軍の将と互角以上のローエングラム侯。

確かに「金髪の孺子」という罵倒の裏で「戦争の天才」という評も聞こえる。「なんだ？」

何故誰も儂の言う事を聞かぬ。

もう良い、儂自ら取り押さえてみせよう」

杖を振りかざした祖父の懐にモーリッツは潜り込み、足を払うと祖父の身体を掴んで倒す。

頭を打たないよう気を使いつつ、祖父の身体を抑え込む。

「離せ、この半端者が！」

「最後に暴力に頼るとは……」。

負けを認めて下さい、お祖父上。

貴方では私に勝てない。

その私が勝てないローエングラム侯に与すべきです」

「貴様……」

「モーリッツ、お祖父様を離しなさい。」

「お前の勝ちです」

「では、父親？」

「勘違いしないように。」

私も一度ローエングラム侯に会ってみます。

その上で決めます」

トマス・フォン・ハーゼは帝都に戻ると、グリユーネワルト伯爵夫人に面会し、ローエングラム侯ラインハルトと面会した。

(なるほど、息子の目はよく見えていたようだ)

トマスは納得し、ハーゼ家一統はローエングラム侯に味方すると告げたのだった。

こういう経緯で、ハーゼ男爵領ブラオハーゼはキルヒアイス艦隊の寄港地となる。

「一別以来です。

覚えていらつしやいますか？」

モーリッツ・フォン・ハーゼが別邸にキルヒアイスを出迎える。

「勿論覚えていますが、モーリッツ・フォン・ハーゼ君。

生きていてくれただけでも嬉しいのに、聞けば一族を説得したのは貴方と聞きました。

ローエングラム侯に代わって礼を申させて下さい」

年下にもキルヒアイスの腰は低い。

「お願いがあります。

私を戦陣の一角に加えて下さい」

「残念ですが、それは無理です。」

理由は、秀才の君ならよく分かるでしょう？」

地球時代より安全は緑、危険は赤で視覚的に知らせる風習がある。

また遠ざかる敵のエンジン光は赤方偏移が掛かり、やや赤みを帯びる。

陸戦において最も隠蔽に使われる地形は緑の森である。

差異を見分けられないのは前線に出せない。

書類業務でも朱線や緑色の葉はよく使われる。

補正装置を使えば何とかなるが、それでも最前線勤務は嫌がられる。

同僚となる兵士、下士官がいつ判断を間違うか分からない者を嫌うのだ。

この場合、流れ弾に見せかけて殺される事もある。

開明的、非差別的と言われるローエングラム侯の軍でもまだ、こういう兵士の気分を

払拭は出来ていない。

肩を落とすモーリッツにキルヒアイスは微笑む。

「ですが、階級の無い立場で私の補佐をしてくれるなら有難いです。

ご存知ですか？」

我が軍の総参謀長は両眼とも義眼なのです。

数年後であれば、士官学校に入り、ハンデを克服しながら昇進していけば士官、将校として我が軍にお迎えしましょう。

今すぐ、というのは幾ら貴族でも士官待遇に出来ません。

私の私的スタッフという立場になります。

それでよろしければ」

「是非!!」

以前からは考えられない前のめりの姿勢に苦笑いしつつ、キルヒアイスは少尉待遇の民間スタッフとして彼に居場所を与えた。

キルヒアイスはハーゼ家から提供された別邸に司令部を置き、作戦会議を開く。

早期に内戦を終わらせる為には、兵力を分散させ、同時に多数の辺境貴族、門閥貴族の莊園、貴族連合側帝国軍駐屯地等を攻略する必要があった。

周辺の星系に詳しく、また近隣の貴族の気質や所有兵力を知るハーゼ家の協力が得られたのは幸いであった。

(これもアンネローゼ様のお人柄のおかげです。

ありがとうございます)

そしてキルヒアイスは僅か一週間で20を超える貴族領を降伏させる。

辺境領占領戦略

銀河帝国において、平民出身の将官が珍しくなくなったのは、今から52年前の第二次ティアマト会戦の敗戦以降である。

それまでは将官として軍を率いるのは貴族の仕事であり、義務であった。

この貴族将官制には、不思議な不文律がある。

爵位によって最初から階級が定まっているのだ。

ブラウンシュヴァイク公は、一切の軍歴が無くても予備役上級大将であった。

無論最初からでは無い。

公爵家嫡男として皇帝に謁見を許された時点では予備役准将である。

そこから当主になると予備役少将に上る。

三十歳を迎えると予備役中将、四十歳で予備役大将に自動で昇進する。

そして公爵家は3万隻単位の指揮権を、軍歴無しで得られる。

リッテンハイム侯は、それより一階級下の予備役大佐から始まった。

侯爵家も軍歴無しで予備役大将にまで上れ、1万5千隻の艦隊指揮権を得る。

伯爵家は予備役中将、1万隻の艦隊指揮権。

子爵家は予備役少将、5千隻の艦隊指揮権。

男爵家は予備役准将、1千隻程度の艦隊指揮権を得られる。

無論、実際に指揮をするには軍務省に届け出て現役になる必要がある。

だが帝国の慣例として、大將以上の将官には個人用旗艦が下賜される。

ブラウンシュヴァイク公もリッテンハイム侯も、派手な内装の戦艦内に貴族を招き、権勢を誇示したり、パーティーを開き公式と私的の入り交ざった密談をした。

貴族将官に実際に敵を打ち破る能力があれば良いが、帝国初期はともかく現在は極めて怪しい。

そこで貴族の家門に属する軍人を補佐官として付ける事が出来た。

本来、帝国幼年学校及び帝国士官学校を出た者は、軍務省が管理し、軍務省の人事に従って配属されるものである。

ブラウンシュヴァイク公の家臣出自であるアン斯巴ツハ准将は、正規の帝国軍人として軍籍登録されている為、本来どの戦場に配属されても文句は言えない。

しかし帝国の慣習で、彼はブラウンシュヴァイク公から離れた役職に任官される事は無い。

ブラウンシュヴァイク公が軍務省高等参事官の職に就くなら、アン斯巴ツハ准将は高等参事官補佐となる。

ブラウンシュヴァイク公がクロプシュトゥック侯追討軍総司令官になった時、アンズバッハ准将は追討軍総司令官付高級副官であった。

軍務尚書は、こういう政治を呑み込み、典礼省や時に宮内省とも連絡を取って、適切な人事をする。

こういう政治向き以外の一般将兵の人事が人事部長に任せられるのだ。

リップシュタット戦役が勃発した現在、多くの貴族は私領、荘園を警備する艦隊を引き連れて、貴族連合軍本営ガイエスブルク要塞に集結していた。

男爵家は1千隻程度の艦隊指揮権は持っているが、私兵として所有しているのは百分の10隻程度である。

もしも指揮権と同数の戦力を全ての貴族が持っていたなら、3700家が集結したリップシュタット連合軍の総艦艇数は最低でも370万隻となってしまう。

キルヒアイス艦隊が進駐したハーゼ男爵領の周辺50光年には21の貴族領が点状する。

伯爵家が2、子爵家が7、男爵家が21である。

どの家も独立系で、どこかの門閥に属している訳ではない。

この内、ベルツ男爵はローエングラム陣営への帰順を申し出て来た。

かつての「ミューゼル大佐の事件簿」で二番目に殺害されたヨハン・ゴットホルプの実家である。

最初は貴族連合軍参加という姿勢を見せていたが、実際には参集せず、周囲の貴族が全軍を引き連れてガイエスブルクに向かった後にローエングラム陣営に連絡を取って来た。

残る20家の私領は空き家である。

キルヒアイスはブラウヒツチ、ジンツァー、ザウケン等准将級に艦艇30隻程を預け、速やかに空き家を占領させた。

ハーゼ家やベルツ家からの情報を得て、120光年先のクロイツフェルト伯爵が中立から貴族連合軍に転じたという報を得て、ベルゲングリューン少将に6000隻の艦隊を預け制圧に向かわせる。

「少将、戦う前には降伏勧告を必ずして下さい」

「よろしいのですか？」

ローエングラム侯としては、そうして戦わずに降伏されるのは困るのでは無いのですか？」

「そうですね、ローエングラム侯はお困りになるでしょう。」

ですが、それをどうにかするのが私の仕事です。

少将は伯爵を降伏させるか……壊滅させて来て下さい」

「了解しました。」

おそらく後者になるでしょう。

ローエングラム侯ではなく、閣下にとって残念でしょうが」

キルヒアイスは苦笑いする。

この時期のベルゲングリューン少将は、ズケズケ思った事を言ってくる。

キルヒアイスは笑って許しているが、時に心に突き刺さる事も言われてしまい、しばしば言葉に窮せられる。

ベルゲングリューンの鋭い指摘は他にもある。

「閣下の早期辺境占領作戦は、まるで先年の反乱軍による我が国への侵攻作戦そっくりですね」

実はそうなのだ。

キルヒアイス直属部隊12000隻は惑星ブラオハーゼ上空に駐留しているが、ワーレン中将の14000隻の艦隊は天頂方向の制圧、ルッツ中将の14000隻の艦隊は天底方向の制圧と分散し、更に主艦隊から多数の分艦隊を派遣して同時に多数の惑星を占領している。

形から見れば、大失敗した先年の自由惑星同盟による帝国領侵攻作戦の艦隊分散配置

そっくりなのである。

では、同じように失敗を運命づけられているのだろうか？

キルヒアイスは出動前の作戦会議でこの事を指摘したベルゲングリューンに答える。

「かつて地球にロシアという国が在りました。

その国をナポレオンという男と、ヒトラーという男が征服しようとし、失敗しました。

戦史の教科書に必ず出てくる失敗の例です。

しかし、ロシアの大地を占領した人物がいるのです。

それはモンゴル帝国のチンギス汗という人物です。

近代と中世の差はありますが、成功と失敗の違いに、兵站線の長さの違いがあります。

フランス帝国もドイツ帝国も、首都を動かさず、基本的に遙か後方の自領から補給を

しました。

先年の反乱軍も同じで、イゼルローン要塞から補給部隊を派遣していました。

ですが、モンゴル帝国の場合は司令部と補給基地そのものが、戦線に合わせて前進し

ていました。

我々もそれに倣いたいと思います」

「ですが……」

ベルゲングリューンは食い下がる。

キルヒアイスは怒らず、意見を聞く。

「ですが、その場合占領した後方が再度反乱を起こす可能性があります」
「少将の仰る通りです。」

かのモンゴル帝国でも、ロシア遠征中にチャイナ方面で離反が起きました。
そこでチンギス汗は、反乱を起こした国は帰還後に城内皆殺しにし、見せしめにしました。

一つの城を見せしめにすれば、他の城の反乱は防げる。

彼にとつての最善のやり方です」

「それに倣いますか？ 閣下」

これはビューロー少将の言である。

「倣うのは最善手を使うという事だけです。」

地球の中世のやり方と、帝国暦の今、同じ方法が最善手ではありません。

それに……」

「それに？」

「私の好みではありません。」

「ここだけは私の好みに合わせていただきます、皆さんよろしいですね？」

一同は笑った上で、「それは自分の好みでもありません」と言い、承諾した。

……見せしめを一個作り、それにより多数を自分たちに従わせるやり方は、この後キルヒアイスを苦しめる事になるが、今それを知る者は居ない。

かくして兵力を分散し、速やかに貴族領を占領し、次の貴族領を占領しに向かうという「一歩間違うと、占領と造反で先に進めなくなる」作戦行動を採った。

同盟軍との違いは、ハーゼ家、ベルツ家という協力者からの情報を基に、30隻とか場合によっては単艦とか、最小の戦力で効率よく「空き巣狙い」が出来た。

空き巣になっていない貴族領には「強盗」に入るのだが、それでも周囲の貴族領が全て落ちているとなると、戦わずして降伏する可能性が高くなる。

一週間でキルヒアイスの直属部隊だけで20、ルツツ、ワーレン提督の部隊と合わせ54ヶ所の貴族領占領に成功した。

そして同じ時期、キルヒアイス別動隊初の軍事的勝利の報が入る。

クロイツフェルト伯爵家の本領に向かったベルゲングリューン艦隊は、2600隻からなる伯爵領私兵部隊の迎撃を受ける。

自分の手で領土を守って来て、伯爵自身も現役の中将という階級を持っている為、迎撃部隊の布陣は戦理にかなったものであった。

だが、兵の質は大きく劣っていた。

あるいは、「戦争の天才」ローエングラム侯配下の勇名に臆したのか、折角の布陣も台

無しにする、ベルゲングリューン艦隊が接近したら即座に発砲という醜態を見せる。「初戦である。」

ローエングラム侯の軍の強さ、キルヒアイス提督麾下の強さを改めて宇宙に示せ！」ベルゲングリューンはそう訓示すると、全艦に後退を命じる。

整然と撤退するベルゲングリューン艦隊を、クロイツフェルト伯爵の私兵艦隊は追撃し、完全に前のめりとなる。

ベルゲングリューンは前面の艦隊を後退させ、左右の艦隊を前進させて凹形陣にするとともに、後陣を惑星クロイツフェルト・エルストに突入させる。

本領を攻撃されると見た艦隊は、個々に足並みを乱し、艦隊としての指揮系統は失われた。

それを見逃さず、ベルゲングリューンは前進、攻撃命令を出す。

練度の差、指揮系統の差もあり、30分の戦闘でクロイツフェルト伯爵軍は敗退した。伯爵は20隻ばかりを率いて本領を脱出し、何処かへ向かった。

「よろしいのですか？」

幕僚がベルゲングリューンに聞く。

「ああ。」

キルヒアイス提督の指示だ。

敵はあえて逃がし、我々が辺境星域を制圧している所をガイエスブルク要塞の貴族どもに知らせろという事だ。

当然追討部隊が派遣されるだろう」

「それを撃破すれば……」

「ああ、多くの惑星は無血開城するだろう」

一つの支配地を皆殺しにする事はしない。

代わりに、現れた敵追討艦隊を叩きのめし、それを宣伝する事で辺境の戦意を挫き、降伏の連鎖を呼ぶというのがキルヒアイスの戦略であった。

敵をおびき寄せる為に、しばらくは派手に勝ってみせる必要があるのだ。

(キルヒアイス閣下は仰っていた。

先年の反乱軍の帝国領侵攻作戦は、作戦としては間違っていないかった、と。

司令官が大貴族の者だったら、簡単に釣り出され、敵策源地のイゼルローンからそう遠くない場所で会戦に及び、恐らくは撃破されていただろう。

作戦の途中段階で「腰抜け」「臆病」「退却將軍」と陰口を叩かれても無視出来るローエングラム侯だから成し得た。

貴族が司令官なら、どんなに優秀であったとしても、宮中で「あの男は臆病だ」と噂される事には耐えられない。

自分の領内に「ご領主様は腰抜けでいらつしやる」等と評判が広がったら統治出来なくなる。

だから、反乱軍が元気な内に何度も戦いを仕掛け、敵を勝ち誇らせたであろう、と）そしてキルヒアイスは、その帝国貴族の心理を利用する為、あえて同盟軍の侵攻作戦と同じように占領地を拡大しまくる。

戦いにおいては、圧勝と、あえてその貴族を逃がす事で彼らの復讐心を煽り、大軍を釣り出す。

キルヒアイスが例にしたロシア帝国も、この後退戦略を堅持し切れない。

ナポレオンに対して、焦土作戦を指揮したバルクライ・ド・トリーー將軍をロシアの宮廷は途中で罷免した。

この時は幸い、後任のクトウゾフ將軍が焦土作戦の有効性を理解し、作戦を引き継いだから、最終的にナポレオンはモスクワで力を使い果たす。

そのロシア帝国が、ナポレオンの100年後、極東の日本帝国と戦った時はクロパトキン將軍を「退却將軍」と罵り、途中途中で会戦せざるを得ない状況を作つて敗れ、判定負けとされた。

ずっと古く、古代ローマにおいても、名将ハンニバル將軍との戦いを避けるファビウス將軍は「クンクタートル（のろま）」とあだ名され、途中解任される。

結局ファビウスの戦法は正しく、後任の将軍はハンニバルと戦って危機に陥る。古来より現代まで、敵の侵攻に対し、戦わずに勝ちを得る方法は理解されない。分かっているても「名誉」を傷つけられると、打って出て戦えという者が騒ぎ出す。キルヒアイス別動隊は、こういう「打って出て戦え」派を大いに刺激する、それが現時点での戦略となっていた。

この戦略は当分成功し続けるが、キルヒアイスには次の問題が降りかかる。帝国の領民は、決して「良民」では無い。占領した地域を上手く統治する必要があるのだった。

民との戦い

比較の対象として「知のヤン・ウエンリー、勇のラインハルト」というものがある。似たようなものに「動のラインハルト、静のヤン・ウエンリー」もある。

用兵についての比較で、銀河帝国のエルネスト・メックリングー提督は

「知勇のバランスはロイエンタール元帥が最も取れている」と評した。

キルヒアイスはどうか？

評価が難しい。

紛れもない名将ではあるが、直接指揮を執った回数は驚く程少ない。

用兵ではないが、主君ラインハルト、敵将ヤンとキルヒアイスを比較したもので

「ワーカホリックなラインハルト、怠惰なヤン・ウエンリー、中庸はキルヒアイス」というものはある。

ラインハルトは戦略・戦術を超え、上流工程としては政治的状況作りや経済の再建、下流工程としては白兵戦まで自分でやりたがる。

経歴に無いのは戦闘艇の操縦くらいであろう。

「宇宙を手にするなら手袋越しではなく、直接この手で掴みたい」

という言葉を残している。

一方ヤン・ウエンリーは、補給も事務も艦隊航法も陸戦指揮も戦闘艇指揮も、専門家に全て任せている。

自ら専門家を見い出すが、後は何もしない。

「エル・ファシルの時に一生分の勤勉さを使い果たした」

という珍言を残している。

ジークフリード・キルヒアイスの場合、その中間である。

彼は実行者を抜擢すると、彼が仕事をしやすい環境をお膳立てし、その後に一任する。今回の辺境制圧においても、敵の情報を分析し、優位な数を整え、補給を万全にし、必要なスタッフを付けた上で最終局面を任せる。

「実際に行ってみないと、状況がどう変わっているのか分からない。

細かい所まで決めず、実行者の手腕に任せたいと思う。

私は、それが出来ると見込んで任せるのだ」

こう言われ、やる気にならない将も少ない。

短期間で占領宙域を拡大するキルヒアイス別動隊には、責任を与えられ、自らの才幹で作戦を行い、それによって成長する佐官以上の軍人が多数生まれていた。

最初の寄港地・惑星ブラオハーゼから動いていない事にも、同様の理由が有った。帝国軍辺境地域は広い。

ローエングラム侯が押さえる首都と、貴族連合軍の拠点となったガイエスブルク要塞、この二点の間にあり、上下左右に膨らんだ領域をキルヒアイス別動隊は攻略している。

だが、首都からガイエスブルク要塞に行くのとは逆の方向だったり、ガイエスブルク要塞より更に先の宙域にも辺境は広がる。

ここをたつた4万隻で制圧するのは困難だ。

そこでキルヒアイスは、帝国軍正規兵で、内戦を嫌って中立を守る各地の警備隊や駐留軍司令官を説得し、味方につけていた。

既に多数の将兵を説得し、味方になっている。

現在、その中では大物と交渉中である。

「私のお願ひ、お聞き入れ下さいますでしょうか？」

レンネンキャンプ提督。

法秩序上、ローエングラム侯に大義が有るのは明白です。

ですが、かつての侯や私の上官であり、その時公正に接してくれた閣下に、命令だ、法秩序上従うべきだ、と上から迫るのを快しとしません。

礼を尽くそうと思います。

どうか、我々にお味方下さい」

超高速通信で、帝都を挟んで反対側にいる辺境軍司令官ヘルムート・レンネンキャンプ中将にキルヒアイスは頭を下げていた。

こういう役目はラインハルトにはさせられない。

レンネンキャンプが快くラインハルトに頭を下げ、忠誠を誓うようにするには、自分が礼を尽くして接すれば良い、そう考えていた。

「心遣いありがたい。」

だが、もつと高圧的に出て良かったのですよ、キルヒアイス上級大将。

貴官が私の下で働いていたのは、もう昔の事だ。

今は貴官が上官、どうぞ命令を出して頂きたい」

レンネンキャンプは既に意思を固めていた。

「ありがとうございます、提督。」

では早速ですが命令させて頂きます」

「何なりと」

「レンネンキャンプ中将は現在駐屯している管区のみならず、隣接する管区全てを降伏もしくは占拠し、賊軍を撃滅、もって帝国への忠誠を示すよう」

「は？」

小官の部隊だけでですか？」

「私は、レンネンキャンプ提督なら出来ると思っておりますが、間違いでしょうか？」

「いや、間違いではありません。」

「謹んで拜命致します」

「よろしい。」

では、詳しく説明します。

中將には追討使の称号と、隣接管区も含めた担当地域の全指揮権を授けます」

「なんと……。」

あ、失礼しました」

「いえ、大丈夫です。」

指揮下には何個かの部隊を入れます。

それらの兵力を再編成し、臨時レンネンキャンプ軍と呼ぶべき部隊を作ります。

これをもって、賊軍を降して下さい。

既に閣下に指揮権があります。

「采配は卿に一任します」

「承知しました」

「補給については、アイゼナツハ少将に連絡して下さい。

既に話はついていきます。

必要な物は足りなくなる前に申し出て下さい」

「おお、アイゼナツハ少将なら知っています。

イゼルローン要塞赴任時に、補給部隊を指揮していましたな。

委細了解致しました。

信頼に応えるべく、粉骨砕身、任務に精励致します」

軍人氣質で「良き上官であれ、優れた部下であれ」をモットーとするレンネンキャンプの人格的に、礼を尽くせば意気に感じ、かつ過度な礼儀は「部下に阿る」と嫌う為、程良い時期に上下関係をはっきりさせた命令を下すやり方をした。

基本的には穏やかで「優し過ぎる」とまで言われるキルヒアイスだが、計算出来ないような無能ではないし、軍隊育ちとして上下関係のあるべき形式もわきまえていた。

これでレンネンキャンプは、全力で別方面の辺境制圧をするだろう。

キルヒアイスは、主君のようにワーカホリックで無いから仕事を他人に任せる、そういう理由では無い。

彼自身、他に仕事がある。

占領地の統治を調査し、領主を査定する仕事も有った。

当然、こういう数字を調べるのを得意とするスタッフもいるし、聞き取り調査をする情報部員もいる。

だが、最終判断はキルヒアイスが行わねばならない。

こういう政治向きな役回りまで任せられる故に、彼はローエングラム陣営の「ナンバー2」なのだ。

ナンバー2というと、ローエングラム陣営参謀長オーベルシュタイン中将が危惧を示している。

キルヒアイスも実は

（自分がこういう役目までするのは危険だし、政治向きの補佐役がラインハルト様には必要だ）

そう思っているのだが、現時点ではまだ居ない。

オーベルシュタイン参謀長なら政治向きの判断も可能だが、キルヒアイスはオーベルシュタインの冷酷さを知るが故に、全面的に任せるのは危険だと見ている。

さて、そうやって貴族の統治を査定していて、明らかに暴虐な統治をしていた惑星も存在した。

元は共和主義者だったという奴隷階級を持ち、それも段階的に「破産奴隷」（借金返済

で解放可能)、「思想犯奴隸」(共和主義者の子孫で今後も矯正が必要)、「害悪的奴隸」(精神病や遺伝病等の社会的害悪の為、死ぬまで使役する)として「被差別者が更に下を差別する」構造を作り、搾取の多重連鎖をしていた。

「難問ですね」

「この惑星から、貴族の代理人を追放しても、その次に位置する特権階級が支配体制を継続するだろう。

「私では解決不可能です」

そういうキルヒアイスをビューロー少将が意地悪い笑顔で見る。

「小官には、閣下の手での解決は不可能でも、誰かやれる者が居れば解決可能だ、

そう言っているように聞こえましたか」

「そう言われ、キルヒアイスも苦笑いする。

「当たり前です。

先回りされてしまいましたね。

これは武断的にどうこう出来る話では有りません。

少将、フェザン商人に伝手は有りませんか？」

「小官には有りませんが、ここは貴族領、伝手を持つ者も多いでしょう」

「そうですね。」

モーリッツ君、御父上のハーゼ子爵を呼んでくれませんか」

ハーゼ家は、帝国宰相リヒテンラーデ公の計らいで男爵から子爵に復帰していた。

キルヒアイスは子爵家に入りする商人と連絡を取った。

キルヒアイスの策は即効性のあるものではない。

その貴族を追い払った後、ここだけは武断的な処置だが、御用商人枠を撤廃させて参入障壁を除いた。

やがてフェザン商人が開発権や農地を購入。

彼等との競争により、奴隷制の生産性の悪さを思い知らせるとともに、今まで比較する相手が無く「こんなものだ」と諦めていた奴隷階級に別の選択肢を見せた。

反乱する奴隷もいれば、フェザン商人に借金をして奴隷身分の自身を買い自由民に戻る者も出た。

奴隷身分のまま戦わない者もいたが、流石にキルヒアイスマ

「そういう者を救う手を私は持っていません。

居たいのならそこに居れば良いのです。

自ら戦わない者に、敢えて援軍等は出しません」

と突き放す。

別の貴族領では、苛斂誅求、酷い租税がされていた。

しかし、そんな惑星で生き抜く民は、狡くしたたかだ強欲だった。あの貴族にしてこの民あり。

解放軍的位置づけのローエングラム侯軍に対し

「食糧と様々な物資をいただきたい。」

もしいただけないのであれば、民衆反乱も辞さない」

と脅し、交渉を仕掛けて来た。

キルヒアイスはこれにも他人の手を借りる。

「ルッツ提督に連絡を取って下さい」

キルヒアイスは自分に付けられた副将を呼ぶ。

「ルッツ提督。」

提督の義弟は内務官僚と聞きました。

有能な方ですか？」

「エルスハイマーは私の妹の夫で、私の目から見ても有能だと思えます。

鼻肩目は有るかもしれませんが、私がまだ佐官の時に知り合い、今も私と同じペースで昇進しています。」

数年もすれば尚書官房長（次官の下の序列3位）になるでしょう」

「それは有能ですね。」

そのエルスハイマー氏に頼みたいのですが」

「呼び出しますか？」

「いえ、帝都からで結構です」

キルヒアイスは、この強欲な惑星の他に、同様の要求をして来た民たちへ、敢えて要求の3倍に及ぶ物資・食糧・貴金属を渡した。

会計担当士官が眉をひそめたが、キルヒアイスは

（大丈夫です。）

この先同じ事は起こらないでしょう。

その為の先行投資です）

と耳打ちし、さらに裏にある策謀を語った。

ちよろい赤毛の若造を騙し、脅し、物資を得た民衆は大喜びをする。

だがすぐに一個の問題に直面した。

この莫大な物資をどう配分するのか？

自分たちが税で奪われていた分（ちよろまかして隠し財産を作つてはいたが）を奪い返す。

元々多めに見積もっていたので、その分までは平等に分配した。それを超えてまだ物資が残る。

やがて、誰がこの物資を管理するのか、もつと本音を言えば誰が自分の財産にするのかで揉め始める。

次第に力がある豪農たちに集約され、彼等が武器を持つて対立し合う。

惑星内で衝突が起こる直前、内務省のユリウス・エルスハイマーが惑星に現れる。

彼は物資が有り過ぎ、欲を出して争う民衆を叱りつけた。

そして余分な物資を没収し、一ヶ所に集める。

有力者を集めて、その物資の管理組合を作らせ、一般市民からは監査委員を作る。

利用に関し組合の一致した要望を必要とし、利用について監査委員が用途をチェックする。

この物資の鍵自体は内務省の官僚が持つ事で、組合も監査委員も内務省管理下に組み込まれた。

やがて民衆は理解した。

大量の物資を渡した甘ちゃんは、実はしたたかな人物で、自分たちが持て余すのを見越していた。

そしてお互い殺し合う内戦が起きる前に、有能な調停者が居れば困らないと分からせる。

強欲な貴族こそ不要だが、やはり彼等は管理する誰かが必要であった、そう気づかせ

れた。

自分たちの弱さ、下手をしたら自滅する様を見せつけられ、彼等は強欲さを引つ込める。

このように貴族支配下で生き抜いたたかさを持った民も、公明正大であるなら管理者・調停者が居た方が便利であると悟り、「善意の解放者にして民衆の調整者」ローエングラム侯の統治を受け入れる事にした。

エルスハイマーは、部下も使つて多くの解放惑星に管理組合や内務省調停所を作り、自治なり中央からの派遣なりで解放後の混乱を收拾する。

この功で彼は、翌年には内務省尚書官房長を飛び越え、内務次官に抜擢される。

キルヒアイスは一月半程ハーゼ子爵領に留まり、様々な問題に対し、大枠での解決策を示して、後は適任者に任せ、占領地を安定させていった。

そしてついに旗艦バルバロッサを次の目的地に向けて出発させる。

「モーリッツ君、卿はこのまま旗艦に残りますか？」

御父上の元に帰りますか？」

モーリッツ・フォン・ハーゼは迷わずに答える。

「お邪魔でなければ、このまま一緒に帰らせて下さい」

キルヒアイスは頷いた。

キルヒアイス艦隊は辺境を更に奥に進む。
貴族連合軍も反撃を始めた。

辺境貴族の反撃

帝都オーデインから補給艦船団を護衛して来たエルンスト・フォン・アイゼナツハ少将は、ふと思いついたように右手を伸ばすと、手のひらを返し、クイクイツと煽いだ。

「全艦停止」

副官が指令を出す。

アイゼナツハはスクリーンに映る光点を指差し、そこに向かうよう指し示す。

「艦隊は小惑星帯に移動。」

隠れてよろしいでしょうか？」

アイゼナツハは頷く。

輸送船団と護衛艦隊は小惑星帯で姿を消す。

アイゼナツハは、味方との距離、帝都からの移動距離、恒星の安定性からこの宙域が危険と感じていた。

予想は当たる。

貴族連合軍と思われる艦隊およそ3800隻が侵入して来た。

その艦隊は小惑星の軌道上に布陣すると、多数の駆逐艦を索敵に出す。

「危険ですな。」

この小惑星帯も探されて、発見されるかもしれません」

副官の言にアイゼナツハは目的地の更に先、キルヒアイスの司令部を指差す。

副官は理解し

「超光速通信を送れ。」

我レ、敵ト遭遇セリ。

救援求ム。

でよろしいですか？」

と確認する。

通信を受けたキルヒアイスは、ビュロー少将に命じ、4200隻の艦隊を派遣する。

ビュロー艦隊は、謎の敵艦隊の背後を衝く形となったが、敵艦隊は即座に陣形を再

編して正対する。

アイゼナツハは左手の指を三本、右手の指を二本立てると、左手を伏せ、右手を突き

出す仕草をする。

「護衛艦隊の内、200隻を抽出。

敵艦隊の背後を襲う。

残る300隻はこのまま船団を護衛」

指令が発せられ、小惑星帯から巡航艦80隻、駆逐艦120隻の艦隊がビュロー艦隊と呼応するように動き出す。

敵艦隊はアイゼナツハの護衛艦隊を発見すると、挟み撃ちを恐れたのかすぐに撤退して行った。

「判断が早い。」

貴族にしては優秀な部類だな」

ビュロー少将はそう評したが、後に判明したところ、その程度の評価では危険な相手であった。

とりあえず護衛艦隊と合流し、輸送船団を共に目的地に移動させる。

アイゼナツハは、キルヒアイス別動隊用の船団を切り離すと、そのままラインハルトの本隊へも物資を届けるべく、小休止の後移動を再開した。

そのアイゼナツハは、未知の敵艦隊の正体を明かす資料を置いていった。

「帝国軍の双頭鷲紋の隣に、帆船？」

「ガレー船の紋ですね」

「資料によるとアストウリア伯の紋章です」

「アストウリア伯か！」

ロルフ・オットー・フォン・アストウリア伯爵は既に79歳。

以前、ラインハルトとキルヒアイスが配属されたりヒヤルト・フォン・グリーンメルスハウゼン大将（故人）と士官学校の同期である。

55歳の時、上級大将に昇進し、次期宇宙艦隊司令長官と評されていたが、病を得て長期入院生活を余儀なくされる。

そのまま予備役編入、そして退役となった。

退役後、領地に引き籠り余生を過ごす……つもりだったが、ここから健康を回復する。故郷の綺麗な空気が身体に良かったようで、数年に一度「新無憂宮」に出仕し、皇帝フリードリヒ4世に謁見したりしていた。

ロルフ・オットー・フォン・アストウリアは、帝国軍の名将シュタイエルマルク提督の副将として自由惑星同盟軍の730年マフィアと戦って来た。

シュタイエルマルク大将退役後に艦隊司令官となり、同盟軍「行進曲」ジャスパー提督と戦い、一番最後に彼に土をつけた（ジャスパーの負けの順であったのは言うまでもない）。

イゼルローン要塞完成後は、要塞主砲「雷神の鎚」射程内に敵軍を誘いこんで一掃する、今に伝わるワンパターンの、つまりそれだけ実用性のある戦法を編み出してもいる。アストウリア伯の子の内、長男と次男は父に先んじて他界した。

三男のヘルマンが分家を立て、軍人としても中将まで昇進して退役した。

孫のヨハン・オットー・フォン・アストウリアは現役の少将だが、単に年少だからではなく、祖父の軍才を受け継いでいないようで昇進が遅い。

それでもこの軍人貴族は、提督と呼ばれる階級が3人居る為、辺境貴族の中では強力である。

ハーゼ子爵家から得た情報では、アストウリア伯爵家の私兵は艦艇240隻、兵員4万人程で寡兵であった。

しかも老将退役時に下げ渡された旧式艦ばかりの筈。

辺境航路に時々現れる犯罪集団に対しては圧倒的に強いが、正規軍相手では話にならない。

だが、アイゼナツハが記録した映像を見ると、現役艦艇のみである。

「次期当主のアストウリア少将ほどの部隊に属していますか?」

人事名簿を調べると、辺境警備隊で2200隻の遊撃艦隊司令官として、丁度この宙域に赴任していた。

「となると、孫の艦隊を主軸とし、老齢ながら当主の勇名で周辺の警備隊や貴族の私兵を糾合したのでしょうか」

「周辺の帝国軍を糾合したのは理解出来ませんが、貴族の私兵もでしょうか?」

「ええ。

ビュロー少将の部隊への配置転換は見事で、手腕の衰えは見られません。しかし、挟み撃ちを避けて撤退した行動が妙です。

判断が早い、それは良い事です、今回は早過ぎる。

二正面で戦える自信が無かったのでしょうか」

「なるほど、練度に差がある混成部隊という事ですか」

「そうです。

だから正面から攻撃をせず、補給艦隊や、その援軍狙いという少数の孤立した艦隊を叩こうとしているのです。

極めて合理的な戦法と言えますよう」

キルヒアイスは、副将の一人ワーレン中将と連絡を取った。

ワーレン艦隊14000隻をもって、ゲリラ戦を仕掛けて来たアストウリア伯の艦隊を撃破すべし。

「では、小官に一任なさると」

「ワーレン提督になら安心して任せる事が出来ます」

「有り難き幸せ。

それでは早速ですが、作戦計画を送りますので許可を頂きたい」

キルヒアイスはワーレンの作戦計画を読み、承認した。

アウグスト・ザムエル・ワーレンは、かつて巡航艦ヘーシユリツヒ・エンチエンで、艦長ラインハルト、副長ワーレン、保安主任キルヒアイスという組み合わせで共に任務に当たった事がある。

艦長だったラインハルトの判断には舌を巻いたが、そのラインハルトの思考を何も言わずとも理解し、阿吽の呼吸で任務を遂行するキルヒアイスにも一目置いている。

その際、任務を途中まで共にしたベンドリング少佐という男がいた。

子爵家の三男坊だというが、能力はともかく清廉な人物で、その任務が抱えていた帝国の闇を見て自由惑星同盟に亡命して行った。

(貴族にも色々な人物がいる)

ラインハルトのような高みから見下ろせば、どいつもこいつも愚かに見えるかもしれないが、凡庸と自らを見て思いあがる事の無いワーレンは、貴族に足を掬われないよう油断せずにアストウリア伯対策に取り掛かる。

ワーレンが対策に取り掛かった頃、もう一人の副将ルツツ中將から報告が入った。

領地である惑星に籠り、降伏せずに抵抗の意思を示している貴族が居る。

家名辞典を引き、キルヒアイスは厄介な相手だと思った。

現在の銀河帝国の門閥貴族制を根本から変える、それがラインハルトの意志である。

一方で彼は、帝政や貴族制そのものを止める気はない。

民衆に自治能力が無く、衆愚政治は破滅に向かうものとして「民主共和制」は否定しているからだ。

優れた人物が指導型統治をする、それ自体はルドルフ・フォン・ゴールデンバウムも間違つてはいない。

だが、その子や孫に無条件に権力を移譲する事と、ある貴族の一門であれば特権を享受出来る門閥制が間違っているのだ。

ローエングラム陣営から見ても、貴族への対処は分かれる。

敵となった門閥貴族は、無条件で叩き潰し、生き残ったら家名だけ残して財産は没収する。

味方となった門閥貴族は、手出しはしないが、徐々に彼等の横の繋がりを断つべく工作する。

この点、いち早く「一門同士情報を共有せず、互助を行わない」という旨を伝えたマリンドルフ家のヒルデガルド令嬢の慧眼は素晴らしい。

地方領主に対する対処は、基本的に「有能ならそのまま使え」「無能な味方なら、上手いこと代官を押し付けて統治権を奪え」「無能な敵なら、時と場合によつては飢えた民衆

の手に委ねよ」としている。

今回抵抗しているゴトラント伯は、有能で民の評判も良い名君であった。

その一方で、彼はリッテンハイム侯の血脈に連なり、「金髪の孺子」嫌いで知られる門閥貴族である。

中央にあつては特権を貪り、内務省の高官となつてゐるが、領地においては善政を敷き、私財を投資して養老院や戦傷軍人の為の療養所を建てる。

同じリッテンハイム侯門閥のヘルクスハイマー伯が失脚した時に、執拗に追いかけたとか、伯の妻を毒殺したとか言われる残忍さと、領内では医師免許を持つ故に時に無償治療もするという優しい面とが共存する。

おそらくは、身分問わず身内には極めて善良だが、外部の者には排他的で攻撃的になるのだろう。

キルヒアイスは、こういう人物を潰す事に特に痛みは感じない。

どんなに他の者に対して善良な人物であろうとも、彼にとつてラインハルトとアンネローゼを侮辱する者は敵なのだ。

「金髪の孺子」「スカートの中の大将」「姉への寵愛で出世した男」というラインハルトへの侮辱だけでも許せないし、その上「身分卑しき淫婦」「高級娼婦」とアンネローゼに罵詈雑言を浴びせた事には死をもつて償わせる事に、何の痛痒も感じない。

だが、彼の領民はどうか？

おそらく領内において「名君」のゴトラント伯の為に、領民たちが立ち上がるだろう。キルヒアイスは、なるべく平民を殺したくない。

では彼等に戦いを挑んで来るゴトラント伯領の領民に対してどう対したら良いか。多少の逡巡の後、覚悟を決めた。

立ち向かって来る敵領の平民の為に、味方の兵士、味方の平民を犠牲にするのは本末転倒である。

司令官が揺らいでいては士気に関わる。

「ルッツ提督。

残念ですが地上戦で、民衆が犠牲になるのは避けられないでしょう。

彼等が戦いを挑んで来る以上、味方の兵士の命を優先させましょう。

敵の領民に対する責任は、私が負います」

ルッツは意外な事を言われて驚いていた。

キルヒアイスなら「敵とはいえ同じ平民です、出来る限り殺さないように」と言ってくるものと思っていたのだ。

「意外ですか？」

ルッツの表情を見てキルヒアイスが問う。

「仕方の無い犠牲……等という言葉で片づけたくはありません。

しかし、現に我々は自由惑星同盟との戦いで敵国の平民を殺しています。

今更同じ帝国人で平民だからという理由で、抵抗してくる敵兵を殺すというのは、我が軍の兵士を危険に晒す事になります。

投降者の処刑や捕虜の虐待、無抵抗の市民の虐殺、我が軍兵士による犯罪行為、これらは問題外です。

しかし、抵抗して来るならばジークフリード・キルヒアイスの責任において命じます。

速やかに制圧し、無力化せよ、と」

「了解しました。

民間人の犠牲を極力減らすべく、速やかに敵抵抗を排除します。

どうぞ、お任せあれ」

ワーレン、ルッツ共に難敵排除に向かった。

だが貴族連合の反撃はまだ始まったばかりである。

キルヒアイスは、次は意外な攻撃を受ける事になる。

見えない敵

コルネリアス・ルッツ中将麾下の艦隊14000隻は、ゴトラント伯領上空に達した。
「卿ら、降伏せよ。」

降伏すればローエングラム侯は寛大な措置を約束するであろう」

この勧告に対し、ゴトラント伯は

「断る、俺には貴族の誇りが有る。」

金髪の孺子に膝を屈する気はさらさら無い」

「繰り返し勧告する。」

卿ら、無駄な抵抗を止めて降伏せよ。

兵力の差は歴然。

命を無駄に捨てる事も無いだろう」

「だから言っただろう、俺には貴族の誇りが有る、と。」

不利だからと言って命を惜しみ、これまで罵つて来た金髪の孺子に降れるものではない。
い。

奴の軍門に降るような腰抜けが、リッテンハイムの一門を名乗れようか！」

「では、せめて平民を巻き込むな。

戦うのなら、卿ら貴族のみで戦え」

「……既に領民には投降の許可を出した。

町にも無防備宣言を出させた。

俺は鉞山跡に居る。

そこで正々堂々と戦おうぞ」

通信は切れた。

「伯爵は個人としては中々の人物のようだ。

貴族の誇りとやらも、一本筋が通っているように見える」

ルッツはそう評する。

「ですが、彼はああ言いましたが、結局民衆が銃を取って戦おうとしています。

領民を巻き込まず戦おう等、口だけでは有りませんか」

「いや、おそらく伯爵は本当に領民を巻き込む気は無いのだろう。

それだからこそ、領民は自ら領主を守ろうと駆け付けるのだ。

キルヒアイス提督が『厄介』と言われるわけだ」

「では仕方ありませんね。

領民も敵性勢力として駆逐する事になります」

「キルヒアイス提督も、自分が責任を負うからやって良いと言われた。

だがそれに甘え、力押しで民衆もろとも敵を倒すのも芸が無い。

俺に任せてくれた提督の意気を感じてみたいと思わんか？」

ルッツは一計を講じた。

攻撃予告日、軌道上からミサイルが撃ち込まれる。

標的は軍用宇宙港、超光速通信基地、防空ミサイル基地、戦闘衛星管制基地、地上軍司令部、水上艦用軍港、造船所、整備基地といった軍事関連施設である。

軌道上でも戦闘衛星、偵察衛星、通信中継衛星、着弾観測衛星を次々と破壊する。

そして戦艦が大気圏突入。

大気圏内用攻撃機を発艦させ、ゴトラント伯の籠る鉾山を精密爆撃する。

平民、民間人義勇兵への被害は出ていないが、こんな生温い攻撃ではゴトラント伯の居場所まで届かない。

攻撃機は、軌道上からのミサイル攻撃で破壊された惑星上の軍事施設に対しても再攻撃をかけ、残った部分も徹底的に叩く。

そして揚陸艇を発進。

鉾山の入り口に攻め寄せせる。

そこでゴトラント伯の私兵集団と地上戦になる。

装甲擲弾兵の分厚い鎧ゆえに、被害は出ない。

そこにゴトラント伯の領民義勇軍が駆け付ける。

「出て行け、侵略者！」

「領主様を守れ！」

そこには動員された嫌々さは無い。

故郷防衛と、慕う領主を守りたい忠誠心に満ち溢れていた。

「もう良い、平民には手を出すな。」

重要拠点は潰した。

こいつらは宇宙に出て来られない。

捨てて次に行くぞ！」

破壊は徹底的だったが、人的被害を敢えて出さない攻撃であった。

そして予定の行動とばかり撤退する。

大気圏内に突入していた戦艦や揚陸艇部隊が軌道上に引き揚げる。

そのまま隊列を整えると、この惑星から離脱して行った。

「敵は出て行ったぞ！」

「我々の勝利だ！」

沸き立つ義勇兵とゴトラント伯の私兵。

「浮かれるな！」

ゴトラント伯が一喝する。

「敵の主力は後退したが、おそらく抑えの駆逐艦部隊くらいは残って、こちらの様子を見ている筈だ。」

油断してはならん」

「はっ」

「卿ら、これは我等リッツテンハイム一族の意地だと申した筈だ。」

領民は避難せよと命じたのに、銃など持って駆け付けるとはどういう事だ！」

「……………」

「だが、礼を言うぞ。」

一命を顧みる事無く、我が家の為に戦おうとしたその志、感動した。

「この通りだ」

頭を下げて礼をし、農民たちの無骨な手を取って握手する伯に、

「ゴトラント伯万歳！」

「領主様に大神オーディンの恩寵あれ！」

あちこちで歓声が上ががる。

「気を引き締める必要があるが、今日はもう攻めて来るまい。」

待っておれ。

我が家秘蔵のワインを皆に振舞おうぞ。

何人かついて参れ」

領主様万歳の声を背に、ゴトラント伯は僅かな供を連れて邸宅に戻る。

先祖が建てた豪壮な宮殿で、これだけ見れば民を搾取しているように見える。

だが何代か前の先祖から、広大な邸宅の一翼は病院として領民に開放し、庭園も領民の憩いの場として利用を許している。

美術品も、安い入場費を払えば鑑賞する事が出来る。

そういう情報を知っていたのか、敷地内の警備兵詰所、通信アンテナ、装甲車駐車場が攻撃されただけで、ほとんどが無事な姿で残っている。

ゴトラント伯は自邸のカーヴに入り、何本かワインを選び持ち出す。

「それがゴトラント家秘蔵のワインですか。

小官はワインの良し悪しは分かりませんが、それらを領民に振舞うとは豪儀ですな」

「誰だ、お前は！」

目の前には装甲擲弾兵が多数並び、伯の私兵は制圧されている。

「小官は帝国軍中将コルネリアス・ルッツです。

伯爵ともあろう身分の方を捕らえるのです。

敬意を持って、小官自らお迎えに参りました」

「ルッツ？ 中将？」

艦隊司令官ではないか！

では、あの艦隊が引き揚げたのは偽装か？」

「偽装、というより計略です。」

激しい攻撃が終わった今日は、もう攻撃は無いと思ったのでしよう？」

「なるほどな……。」

あの激しい攻撃と、領民に手を出さずに引き揚げたのは、卿らがここに潜む為の陽動であったか。

金髪の孺子の部下らしい、狡い作戦だな」

「お褒めいただき、光栄」

「俺の負けだ。」

どこなりとも連れて行け。

その前に言っておく事がある」

「何でしよう？」

「領民に手を出す事はならん」

「言われるまでもありません」

「ならば良い」

この男は、最後まで誇り高い貴族であった。

「ルッツ提督、ご苦勞様でした」

キルヒアイスが出迎える。

「聞けば、提督自らゴトラント伯捕縛作戰実行部隊に加わったとか」

「軽率だったかもしれないが、ああいう氣位の高い男には、自分が出向くくらいでない
と拗れると考えました」

「そうですね。」

艦隊司令官の卿が出向いたから、伯も無駄な抵抗をせず、大人しく捕縛されたので
しよう。

ところで、伯は自身の為を駆け付けた民に、秘蔵のワインを振舞おうとしたとか。

私はそんな大したワインを持っていませんが、実行部隊を勞うワインを用意しました
ので、どうぞお持ち帰り下さい」

「有難く頂きます。」

部下たちも喜ぶでしょうから」

そしてキルヒアイスとルッツは雑談する。

「実は、おかしな事をゴトラント伯領の民が言っていました」

「おかしな事？」

「ええ、『これでローエングラム侯による弱者切り捨ての世になる』とか、

『帝国から優しさが失われる』とか

『弱い農民は淘汰されてしまう』とかです」

「それは……嘘とは言えないのが残念ですね。」

そういう側面は確かに有ります。

ただ、弱者や敗者は見捨てるのではなく、ちゃんと救済する制度を用意したいと思っています。

しかし、不思議ですね。

実は全く同じ事を言っている敵がいたのです」

キルヒアイス艦隊も、多数の分艦隊を派遣し、多くの惑星を占領している。

4月、5月は無抵抗で降伏する惑星が多かったが、6月に入ると貴族の留守領だった帝国軍の辺境基地で、平民や下級兵士が抵抗をし始める。

その者たちは一概に

「ローエングラム侯の支配する世は、貴族の治める世より過酷である」

「ローエングラム侯のやり方は、一部の強い者だけがより強くなるだけだ」

「弱肉強食の世がやって来て、弱い者は生きる価値も無いとされる」と新体制への不安を口にする。

「没落しても貴族の世なら、農奴や小作人として生きる道がある。

だが弱肉強食の世では、農奴や小作人にもなれず、野垂れ死ぬだけだ」

「貴族領主には苛斂誅求を行う者も確かに居る。

しかし貴族は領民が全て死んだら生きていけない。

それに名君と呼ばれる領主もいるし、領地経営のプロである代官を雇う場合もある。

だがローエングラム侯の世では全てが競争となる。

競争社会は安定を生まない。

全ての民が没落し、利益第一のフェザーン商人に帝国の富を献上する羽目に陥る」
「曖昧さや、ぬるま湯をローエングラム侯は許さない。

我々は常に全力を出し続けなければならないのか？

何故ローエングラム侯の命で、効率だけを求めなければならないのか」

ローエングラム侯の政策を徹底的にネガティブに分析したものだ。

故に一面正解である。

これをもしローエングラム侯ラインハルトに言ってみたら、彼は

「その通りだ、全力を出さぬ者がこれまでのように安穩と生きられると思うか？」

等と言いかねない。

万人がローエングラム侯の覇気を浴びて刺激される訳ではない。

中には怖気づいてしまう者もいる。

能力が無いのに貴族だからと言って特権を貪る社会をラインハルトは許さない。

能力の有る者は身分を問わず抜擢するのもラインハルトである。

では平民、貧民で能力が無い者はどうなるのか？

身分で差別されるが、代わりに責任の伴わない今の世は言い訳に困らない。

自分は貴族じゃないから、何もさせて貰えないと酒を飲んで愚痴を零していれば、自分の無能を直視しないで済む。

平等に機会が与えられたなら、没落するのは自分のせい、どこにも責任転嫁出来ない。

支配される側の全ての者が、不満を抱えているとは限らない。

自分で考えて何かをするよりも、命令されている方が幸せな者は存在する。

成功も失敗も命令した側の責任で、命令する側が愚痴を聞き流す器量さえあれば、この関係は長続きする。

帝国貴族四千家以上、この中で苛政の貴族というのは、少ない故に目立つのだ。

多くの貴族は自分の猟官活動の時は増税をするが、高官になると祭りをして還元した

りと、常に過酷な支配という訳では無い。

ハズレの貴族領に生まれる不運さえなければ、平民は怠けていても最低限の生活は保障されるのだ。

故に帝国の領民は民主共和主義に憧れない。

あんなのにかぶれるのは、要領の悪い者だと思っっている。

銀河連邦末期から今に至る490年余り、こういう意識の人間が銀河帝国を支持している。

こういう層がルドルフ・フォン・ゴールデンバウムを帝位に就け、拍手をして支配を受け入れたのだ。

リップシュタット戦役が始まり一月半、急にこういう層にネガティブな意見が流れ始めた。

これを偶然と思うキルヒアイスではない。

「貴族連合に、帝国を支持する民衆を使ってローエングラム侯を否定する、そういう攻撃を仕掛けて来る者がいるようですね。」

この声が大きくなれば、私たちの辺境占領行動は遅延します。

兵を指揮して戦う相手以上に、姿無きこの敵の方が恐ろしいかもしれません」

キルヒアイスは幕僚たちに語る。

「それで、閣下にはどのような対抗策が有りますか？

黙って受け容れる訳ではないでしょう？」

ベルゲングリューンの質問にキルヒアイスは答える。

「百の言葉は、一の行動で否定します。

百の否定は、一個の事実をもつて真であると証明します。

迂遠かもしれませんが、皆さん、どうか私に協力して下さい」

見えない敵との戦いが始まる。

非対象戦争

銀河帝国辺境領域、ここの軍事バランスは大きくローエングラム侯陣営のキルヒアイス別動隊に傾いている。

ほとんどの領主がガイエスブルク要塞に私兵をもつて参集していて、留守部隊やあえてガイエスブルク要塞に行かなかった貴族軍、更に親貴族連合な帝国軍辺境警備隊を全て合わせても2万隻に届かない。

故に、まともな会戦を選ばなかった、情報戦を仕掛けて来た貴族連合軍の誰かは知らないが、その者の判断は正しい。

そしていまだ被害は出ていないが、ゲリラ戦に出て補給部隊を狙い始めたアストウリア伯の選択も正しい。

ジークフリード・キルヒアイスは、単なる戦術指揮官では対処出来ない戦いを仕掛けられている。

ジークフリード・キルヒアイスが単に軍事的才幹だけに秀でた人物なら、ローエングラム侯ラインハルトは彼を腹心にはしないだろう。

政治向きの判断、経済的な物の見方、社会的不正を憎む心、全てラインハルトに匹敵

する。

違いは、ラインハルトが必要な霸道を歩める人物なのに対し、キルヒアイスはこれまでそのような気配がなく、周囲からは甘いと見られている点だ。

性格的な部分もあるが、一つにはキルヒアイスの計算もある。

覇者は一人、自分も同じやり方をしてはならないと歯止めをかけている。

ラインハルトの姉、キルヒアイスも敬愛するグリユーネワルト伯爵夫人アンネローゼから頼まれている。

「ジーク、ラインハルトをよろしくね」

そう言われたキルヒアイスは、時にラインハルトと共に走るも、時には暴走しがちなラインハルトの引き留め役をしている。

ラインハルトは紛れもなく天才であるが、若き天才ゆえの未熟さ、稚気が多分に残っている。

自ら決闘代理人を引き受けてプロの暗殺者と戦ったり、挑発に乗って元同盟軍最強部隊「薔薇の騎士」連隊長だった男と喧嘩しようとしたり、グリユーネワルト伯爵夫人を憎むベーネミュンデ侯爵夫人の暗殺者と単身対峙したりと、キルヒアイスが傍にいないと結構無茶をする。

危うさは時に、門閥貴族を憎む余り、味方を見捨てるかどうかの判断に出そうになる。

そういう時にキルヒアイスは

「分かっておいででしょう?」

貴族を救うのではなく、その下の兵士たちを救うのです」

と助言の形で、ラインハルトの心の天秤が冷血に傾くのを冷静な方に戻す。

こういうラインハルトへの世話焼きが、キルヒアイスを「温厚で優しい」と周囲に思わせている。

だがラインハルトは、決してキルヒアイスが温厚なだけの人物では無い事を知っている。

幼年学校時代、アンネローゼを侮辱した貴族の子弟に、最初の一撃を入れるのはキルヒアイスの方が多かった。

ラインハルトが罰せられないよう、責任を一身に負つての行為ではあるが、容赦の無い攻撃、時に涼しい顔で相手の股間を蹴り上げて、鞆丸破裂による退学に追いやった恐ろしさもある。

手柄を横取りされないよう、上官に先んじて司令部にラインハルトの戦功を報告するしたたかさも持っている。

そして、ここぞという時のラインハルトへの助言は

「おやりなさい、ラインハルト様」

なのだ。

ラインハルトが一目置く相手は、キルヒアイスの他は敵軍にいるヤン・ウエンリー以外にはいない。

ラインハルトはこの2人には、自身と同様の「戦場を超え、人類社会を見渡す目」が備わっているものと見ていた。

そのキルヒアイスが、ラインハルトの傍を離れている。

つまり、ラインハルトのお守りをしていない。

キルヒアイスはこの方面の責任者として、独自の判断で行動しなければならない。

ラインハルトは寂しい一方で

（俺の世話から解き放たれたキルヒアイスは、どれだけの能力を發揮するだろうか？）

と楽しみにもしていた。

キルヒアイスは、ラインハルトのコピーとして動く事も出来るが、今の状況はラインハルトと同じでは後手後手に回る可能性が高い。

ラインハルトは挑戦を一々受けて立つ、極めて悪い癖がある。

キルヒアイスにはそういう対抗意識は無い。

そうした方が良いと判断すれば、ヤン・ウエンリーとすら戦わない。

アムリッツア会戦に先立つドヴェルグ星域会戦で、3倍の兵力を持ちながらキルヒア

イスはヤンの第13艦隊に対して攻勢に出ず、あくまでも遠距離からの攻撃で疲労させようとのみした。

「口舌の攻撃に対し、同じ戦場では戦いません」

キルヒアイスは断言した。

「実績で示せば、レトリックだけの宣伝は効果を失います」

ラインハルトの陣容を見れば、彼の思想が見えて来る。

貴族社会からの脱却、新進気鋭の若手実力者の抜擢、無駄を嫌う合理主義。

古い革命家の用語で言えば「階級闘争」「旧勢力に対する新勢力の挑戦」に見える。

そこには期待とともに、漠然とした恐怖が見える。

やり手の企業家に買収された、派閥とコネが横行した大企業の低賃金労働者の気分と言えれば分かりやすい。

企業の成績は向上するかもしれないが、自身はリストラされてしまう恐怖。

自分が外されるなら、若手社員に追い抜かれるくらいなら、今のぬるま湯の方が良い。そういう者に扇動者は付け込んだ。

自分たちは取り残されるといふ疑心暗鬼を憑依させた。

一旦疑心暗鬼の虜となった者に説得は意味を成さない。

キルヒアイスは優しいように見えて、辛辣な部分もある。

キルヒアイスは独断である布告をする。

「解放した惑星は民衆の自治に委ねる。

現在は戦時中であるが、戦後希望する場合旧領主復帰も許可する」

「よろしいのですか？

旧領主復帰など、ローエングラム侯が許可する筈はありません」

「この戦場では私が全権委任されています。

宣言するだけなら何の問題もありません。

大丈夫です、宣言を破棄したり、民衆を騙したりせず、結局旧領主のほとんどは排除

されますよ。

民衆の意思によって」

キルヒアイスは宣言で敵対的な民衆を安心させる形で、一度突き放した。

貴族復帰を許した以上、彼等が抵抗する必要は無くなつたし、対立の原因となる占領

軍あるいは守備隊を全て引き揚げる事が出来る。

続いてキルヒアイスは、好意的占領惑星や味方貴族領に対し、産業指導を行う。

遠征前に生産性の低い惑星の開発や農業指導をする、または特産品の流通をさせるプ

ランはローエングラム侯派官僚によって立案させていた。

これを半強制的に実行させた。

ある程度生産性のある惑星は放置していて良かったのだが、敵の扇動戦に対して反撃する必要が生じた為、あえて実行する。

鉱工業については、短期間で生産性が劇的に向上する。

軽工業については、貴族の販路とは違う別系統の販路を紹介し、利益を上げる。

ノルマが決まっただけで労働をさせられる場合、生産はそのノルマの辺りで収まる。

決してノルマを大きく上回る生産はされない。

ノルマを上げた場合、サボタージュが発生し、結局以前のノルマに戻ってしまう。

何故そうなるかと言うと、労働者は貴族に対する奉仕で働かされる為、最低限の使役費は支払われるものの、生産量を上げた事による利益は貴族のものとなり、労働者に還元されないからだ。

奴隷労働させられている体で、休みながら、無駄話をしながら、ダラダラとした作業が行われる。

故に帝国の領民は良民では無いのだ。

そして貴族が如何に優れた統治者となろうとも、貴族ゆえの限界も存在する。

貴族社会の枠内の流通や販路、納入先しか使う事が出来ないのだ。

貴族社会というのは、ある種のカルテルと言える。

ゴールデンバウム朝銀河帝国が建国され、実力者を貴族として封じ、辺境の開発を命じた時に、相互の利益の為に「貴族の領地で生産された物は、貴族が作った商社を介し、貴族が投資した流通会社で銀河の隅々に運ばれ、貴族領に売られてそこで活用される」システムが構築された。

当時の辺境という不便な場所で貴族が資金を投じて開発し、製品を生産しても、売る先が無いと破産するだけである。

貴族間で顧客関係を作り、共存共栄させる、その商談や接待の場としてパーティやサロンが有り、貴族社会のあらゆる事は社交界で決まるようになった。

これはゴールデンバウム朝初期から中期においては非常に役立ったが、建国以降480年を超える現在においては排他的な利益団体で、格式だけ高く大して便利でもコストパフォーマンスの良いものでも無くなっていた。

しかし貴族は、この貴族社会の企業を使う事しか出来ない。

他にもっと安いフェザン系独立企業を使ったりすると、貴族社会から排除され、難癖をつけられて潰されかねないのだ。

潰されないとしても、自分の関連する企業が利益を得られなくなる。

貴族は貴族であるがゆえに、硬直した流通・販路の利用以外許されないのだ。

自由競争が可能になり、あらゆる販路、流通企業を使えるようになれば、利益率は上

がる。

キルヒアイス、ひいてはラインハルトは、普通に産業活動をすれば、それだけで利益が上がるかと分かっていた。

そうさせない為の貴族社会は解体する。

独立系資本を許さない貴族の私兵や、貴族系企業の「警備会社」からの妨害は実力で排除する。

短期間でも目に見える利益を上げると、それを賞与として労働者に支給するようキルヒアイスは指導する。

折角の利益を、味方とはいえ貴族や現地代官の懐に入れてしまつては意味が無い。

労働者に十分な報酬と、有給休暇を与える事で、士気は上がり生産性も向上した。

それを有能な労働者ではなく、一般的な労働者で成し遂げさせる事に意味がある。

キルヒアイスは、利益を上げ、生産性を上げるのは労働者の質でなく、経営に関わる上層部の有能無能が影響すると示してみせたのだ。

「無能な労働者は切り捨てられる」に対する回答

「無能な経営者を取り換えれば、無能な労働者は無能では無くなり、収入と休暇は増える」

これを実績で示したのだった。

キルヒアイスは、敵対的な占領惑星に対し、これを強要しない。

民衆の自治に任せ、「我々のやり方を受け入れたいなら教えるが、そうでないなら好きにして良い」と突き放す。

何時でも「ローエングラム式」を教えるが、拒否するならこちらからは何もしない。「時間が経つにつれ、彼等も分かるでしょう。

同じくらしいの水準の惑星が、次第に豊かで自由になるのを見て、いつまで頑ななままでいられるか。

扇動というものは、実利の前に霧散するでしょう」

「それでも貴族の支配を望まれたらどうしますか？」

「それは彼等の自由です。

彼等が生きたいように生きれば良いのです。

口出しはしません」

幕僚たちは、キルヒアイスは民衆の意思を尊重しているように見せて、その実「滅びたいなら好きに滅びよ」と言っている事に気づいた。

意外に冷酷な面も有ると、今更気づいた。

(閣下は思った以上に恐ろしい)

そして、実力主義によって切り捨てられる可能性があるのは、統治者、経営者、運用

者という上位の者である。

(ローエングラム体制が厳しい社会なのは確かだ。

実際そういう面があると、キルヒアイス閣下も言っていた。

だが厳しさの影響を受けるのは上の者で、上が有能なら下も栄える。

今まで特権によって守られてきた貴族たちには辛い世となるだろう)

キルヒアイスが目に見えない扇動家に対し、実績をもつて反撃をする。

その戦いの先陣、指導し、計画し、実践する役割をキルヒアイスはモーリッツ・フォン・ハーゼにさせていた。

モーリッツ・フォン・ハーゼはゴールデンバウム朝で最も立場が弱い「遺伝病」を持つ。

この人事だけでも、「ローエングラム体制は弱者切り捨て」という宣伝を否定してみせた。

繰り返し言うが、ジークフリード・キルヒアイスとは単なる軍人ではない。

時に辛辣さも見せる、紛れもないローエングラム侯の無二の腹心であった。

老提督の限界

アウグスト・ザムエル・ワーレン中将率いる艦隊は、アストウリア伯率いる艦隊を追っている。

アストウリア伯は補給艦隊や商船隊を狙っている為、これらへの襲撃を成功させては、ローエングラム侯やキルヒアイス提督の辺境開発構想を「口だけで、実際には航路を守れない」と非難させるきっかけになるだろ。

ゆえにアストウリア伯を早急に捕捉、撃滅する必要がある。

人類の地球時代から、こういう通商破壊に出た艦隊は追跡が難しい。

大海に比べ、艦隊など微小な存在だからだ。

宇宙に出た後は猶更追跡困難となる。

宇宙空間の規模は惑星の海の比では無いからだ。

そこでワーレンは無意味な追いかけっこはしない事にする。

自らの艦隊を分散させて航路警備に充てる。

そして司令部の艦隊3200隻で勝負を決めようとしていた。

これは古来よりの常套戦術である。

大軍を前に敵は逃げる。

逃げに入った敵を大軍で追いかけても捕まえられない。

籠城する敵に至っては出て来ない。

そこで、指揮官の兵力を少なくし、あえて隙だらけとする。

分かっているにしても、司令官を倒せば勝敗は一気に決まる誘惑に勝てず、敵軍は誘い出される。

そこを味方の兵力が反転、包囲して殲滅する。

上手くいけば良いが、失敗する場合もある。

敵の攻撃が苛烈だったり、味方の反転が遅かったりして、餌とした司令官がそのまま食い殺されてしまう危険性が伴う。

そこで、上手く反転させる方法や、少数の本陣が耐え抜く防御法に将たちは工夫を凝らす。

ワーレンはやや違った。

この兵力で勝てると考えている。

無論敵を侮ってはいない。

アストウリア伯の経歴は輝かしいものだが、そこに欠点を見い出していた。

ワーレンの分艦隊は航路警備の傍ら、貴族連合に味方する帝国軍基地を襲撃する。

破壊が目的ではない。

物資を狙う。

ゲリラ戦で補給部隊を狙うアストウリア伯に、貴族連合軍の基地を攻めて補給物資を焼き払う同じ戦法を選択したのだ。

そしてワーレン本隊は、アストウリア伯の領地である惑星カーデイスに攻めかかる。

そして敢えて落とさない。

兵法で言う後詰め決戦である。

味方を救いに来ない将は見限られる。

その心理を使った決戦誘引である。

果たしてアストウリア伯の艦隊は惑星カーデイスに駆け付けて来た。

周囲の補給拠点を潰され、本拠地を攻撃されたとあつては、出て来ざるを得ない。

「アストウリア伯の艦隊、数およそ5800隻。

以前よりも増えています」

「また更に貴族の私兵を糾合したようだな」

「どうなさいますか？」

事前に聞いていた4200隻より大幅に増えた以上、一度出直しますか？」

参謀の問いにワーレンは

「このままで良い」

と断言した。

戦闘が始まる。

流石に二十数年前に次期宇宙艦隊司令長官と言われた将だけあり、攻勢において濃密な砲火を浴びせ、部隊後退時は速やかに射程外に逃れる。

「老いたとはいえ、流石に一味違うな。」

この老人がずっと現役を続けていたなら、メルカツ提督程に恐ろしい敵となっていただろう」

ワーレンはそう評する。

そして

（退役して楽隠居していた二十数年が、メルカツ提督程の脅威では無い要因だ）

と内心呟いていた。

戦いはアストウリア伯優勢である。

彼の艦隊は接近し、ワーレン艦隊を惑星大気圏に圧迫していた。

「よし、この距離だ！

ワルキューレ発艦、宙雷艇も出せ。

近接攻撃を仕掛けるぞ」

地球の歴史では航空母艦、宇宙進出後は宇宙母艦と呼ばれる艦種は、会戦の脇役と主役を行ったり来たりする扱いの難しい軍艦である。

大型の艦体から多数の小型機を発進させて運用する。

誕生当初は、艦載機の航続距離も短く、敵洋上艦を攻撃する武器が貧弱で、偵察や弾着観測、更には味方を観測する敵の気球迎撃に使われた。

やがて艦載機のエンジン出力が向上し、航続距離が伸び、速度が増し、運動性能に優れ、武器搭載量が増えると海戦の主力に躍り出た。

停泊地への空襲、輸送船団への攻撃、敵戦艦部隊の邀撃、地上の基地を空襲と縦横無尽に暴れ回った。

この空母の脅威は、近接信管付対空砲に始まり、誘導ミサイル、僚艦とデータ共有しての艦隊防空システムの完成により、絶対的な強者ではなくなつて弱まる。

それでも艦載機による長距離偵察や、遠征軍の先鋒として敵基地壊滅を行う等、艦は使用され続けた。

宇宙時代になり、妨害電波や偽装バルーン、小型電子機器なら破壊される電磁パルス場の発展で、鈍重な艦船よりも高速で小回りが利く上に強力な武器を持つ艦載機は、再び戦争の主役に戻った。

時には人型兵器や可変戦闘機として、大型艦を狩る艦載機の時代が続き、宇宙母艦や母艦機能を高めた巡航艦が活躍した。

それが恒星間移動時代になると様変わりする。

艦船の速度は毎秒数千キロメートル単位から、光速の何パーセントかという単位に変わる。

すると、機関が小型の艦載機は、軍艦に置いていかれてしまう。

それでも、デブリや小惑星や氷が漂う空間等で艦載機は活躍するし、会戦時には艦船も速度を落とす為、活動の場は残っていた。

今から八十年程前に、宇宙母艦が没落する軍艦の進化が起こる。

ビーム砲の出力強化と、恒星間航行時に星間物質やプラズマから船体を守る偏向フィールドが長距離ビームなら弾くまでに強化された事である。

交戦距離が延びる。

そうなると艦載機は不利であった。

長距離ビームを撃ち合い、偏向フィールドで弾き合う距離において、伝統的な艦載機の使用法アウトレンジを使った部隊は、その長距離でも当てて来る進化した火器制御装置と防空ミサイルの前に到着前に壊滅させられ、艦載機の持つ火力では偏向フィールドで守られた軍艦を撃破出来ない。

こういう事情で、宇宙母艦と艦載機は大会戦の舞台から姿を消す。

第二次ティアマト会戦の頃、戦場には宇宙母艦は無く、母艦機能のある戦艦や巡航艦から偵察用艦載機が出される程度であった。

小惑星帯等の戦闘等、低速域、障害物多数という戦場は案外多く、宇宙母艦が完全に消滅する事は無かったが、脇役に追い込まれていた。

アストウリア伯ロルフ・オットーが名将と呼ばれ、戦い続けていたのはこの時代である。

変化は銀河帝国から起きた。

伝統的なアウトレンジ戦法、長距離で艦載機を発艦させて敵を叩くという戦法を止めて、小型艦による近接戦闘を考え出した。

それが宙雷艇とその母艦である。

宙雷艇は偏向フィールドをもつともせず突き破る実体弾兵器レールガンを大量に搭載した艦で、近距離で発艦すると高速を活かして敵に接近、次々と戦艦を沈めていった。

これに対し、自らも接近戦、中小艦艇による突撃と近接戦での敵撃破を得意とする同盟軍のファン・チューリン統合作戦本部長は、宇宙母艦の防御力強化とともに、艦載機スパルタニアン開発を命じた。

スパルタニアンは、帝国軍の宙雷艇を破壊可能な火力を持つ。

更に開発の過程で、偏向フィールドを中和し、防御の内側に入り込めるようになった。つまり、「艦載機程度の火力は偏向フィールドの前に無力」という前提が崩れ、高収束高エネルギーのレーザーを使って、防御の内側から敵艦を攻撃し、撃沈するようになった。

更にスパルタニアンは第二次イゼルローン要塞攻防戦でも使用され、主砲「雷神の鎚」では撃墜困難な機体の小ささを活かして要塞を肉薄攻撃した。

この時は火力不足で、要塞に迫れど傷一つ付けられずに終わる。

だが、帝国軍も艦載機の新しい使い方を、数多の敗戦とイゼルローン要塞肉薄という脅威を糧に学んだ。

こうして同盟軍が対要塞用魚雷（スクリューもしくは電位差推進によって流体金属層を潜り進んで要塞表面を攻撃する兵器）を開発し、第三次イゼルローン要塞攻防戦に挑んで来た時、イゼルローン要塞からは帝国軍の新型艦載機ワルク्यूレが出撃し、航空戦が行われた。

ワルク्यूレは、本来宙雷艇ハンターとして開発されたスパルタニアン対策で製作され、火力は高収束レーザー砲と小型反応弾2発と軽装だが、機動力において勝る。

こうして艦載機、単座式戦闘艇は復活した。

ワーレンは、接近したアストウリア伯の艦隊に対し、手持ちの全宇宙母艦からワルキューレを発進させる。

丁度宇宙母艦不遇の時代の戦闘しかしらないアストウリア伯ロルフ・オットーには、頭で分かっているにしても、反射神経的に間に合わない戦法であった。

対艦攻撃力が戻った単座式戦闘艇に展開されてしまったら、艦艇に勝ち目は無い。

単座式戦闘艇は、接近前に艦隊防空と呼ばれるデータリンクを駆使しての遠距離迎撃や、対抗出来る自軍戦闘艇の発進をしておかないとならない。

艦隊の中に入り込まれると、各種ジャミング機能でデータリンクや防御フィールドを無効化され、個々の艦艇の防空兵器で対処せざるを得なくなる。

個艦防空では、迎撃困難な事が多い。

レーダーや光学測距儀が生きている内は艦有利だが、レーダー透過装置や乱反射剤（レーザーロックオンを外す）、もつと単純なチャフ（電波攪乱用金属片）やフレア（熱源探知妨害）、煙幕を使われるだけで小型の戦闘艇有利に変わる。

アストウリア伯当主ロルフ・オットーの現役時代は、理論は分かっているも戦術が追いつかず、単座式宇宙艇の機関出力の低さもあって「大規模戦闘では役に立たない」という意識が強い。

時代が変われば戦術も変わる。

アストウリア伯はそれを思い知らされていた。

勝敗はほとんど決まった。

アストウリア伯は艦艇5800隻の内、2000隻余を損傷または喪失、彼に従っていた貴族の私兵は統制に従わず逃走し、残るは1500隻程であった。

「勝敗は決した。

無駄な抵抗を止めて降伏せよ。

卿たちはよく戦った。

今降伏すれば、ローエングラム侯は卿らを、勇戦に相応しい待遇で受け入れるであろう」

ワーレンは呼び掛ける。

貴族軍人たるアストウリア伯に向けてというより、同じ帝国軍である残存兵力に向けてのものであった。

だが意外な事に、期待していなかったアストウリア伯から返信が来る。

『麒麟も老いては驚馬に劣る』という古代の格言を思い知った。

最早この老体は、新しい世において必要の無い存在、討ち取って手柄にせよ。

儂はローエングラム侯に対し他意は無い。

会った事すら無いので、敵意を抱きようもない。

だがブラウンシュヴァイク公やリッテンハイム侯とは先代以来の付き合いがある。ゴールデンバウム朝にも長年仕えて来た。

新時代を見る事の出来ない不肖の身なれば、旧来の友誼、忠誠に殉じようと思う。降伏勧告は有り難いが受け容れられない。

感謝の礼砲を放つゆえ、その後に再度砲火を交えん。

卿の今後に栄光あれ』

そしてアストウリア伯の残存艦隊は、ワーレン艦隊の居ない方へ主砲を三連斉射した。

その後、艦隊を凸形陣に再編し、突撃を敢行する。

ワーレンは凹形陣で迎え撃ち、アストウリア伯に3倍する数の力で撃滅した。

アストウリア伯ロルフ・オットーは旗艦と運命を共にする。

「提督、この突撃に加わっていない300隻程の艦隊が離脱していきます」

「行かせてやれ」

「は？」

「おそらく後継のヨハン・オットー・フォン・アストウリア少将が脱出したのだろう。」

あの老人は、確かに国や古い友誼に殉じたが、一方で孫を逃がす為に踏み止まって様

牲となった。

「見事な老人ではないか」

この余裕の裏には、次期当主ヨハン・オットーが専らデスクワークと社交界でのダンスを得意とする人で、実戦部隊は辛うじて統率が出来るレベルの「敵にしても怖くも何ともない」軍人である事もあった。

かくしてワーレンは、キルヒアイスが辺境に普及させる流通の自由化を脅かす脅威の排除に成功した。

航路が安全になった後、1隻のフェザン商船が安心して航行している。

その船とキルヒアイスの本隊が遭遇した。

「私どもはフェザンの商人でして、この船はベリヨースカ号と言います。

積み荷は地球までの巡礼者たちで、ご覧の通り女子供老人ばかりです」

「何か不足している物は有りませんか？」

船長とキルヒアイスの通信に、地球への巡礼者の長老と思われる者が入る。

「赤ん坊用のミルクと毛布が不足しております」

キルヒアイスは頷くと、軍の物資を分けてやるように命じた。

キルヒアイス艦隊とベリヨースカ号は別れた。

その際に、この先も臨検に合わないよう通行許可証も渡された。

「いい人ですな、キルヒアイス提督は」

ベリヨースカ号の船橋で、事務長が感想を述べる。

「気の毒にな……」

それが船長のボリス・コーネフの言葉であり、事務長は疑問を持つ。

「え、何がですか」

船長はコーヒーを飲みながら呟いた。

「いい人間は長生きしないよ。」

特にこんなご時勢にはな」

辺境の大貴族

ゴールデンバウム朝において貴族といっても複数の種類が存在する。

分かりやすいのはリヒテンラーデ公やゲルラツハ子爵のような官僚貴族である。

領地は少なく、帝都オーデインや帝国内の惑星の一部を莊園として持つくらいで、固有の武力を持たない。

帝国の行政を担当し、その業務における専門家となり、辣腕を振るう者も多い。

軍事専門の貴族であるミュッケンベルガー家やオフレッツサー家も官僚貴族と言える。

実務家の彼等だが、非常にラインハルトの敵が多い。

家によって分野がほぼ決まっており、法務畑の家柄が財務畑に行く事は可能だが、出世は難しい。

決められた枠の中で、同僚を蹴落とし合い、上役に気を使って昇進していく。

そんな彼等には、誰に気を配るでもなく昇進し続けるラインハルトは、才能ではなく「姉に対する皇帝陛下の寵愛のお零れを受けた」者として見てしまい、不公平だと逆恨みをするものが多いのだ。

続いて地方貴族という種類がある。

ゴールデンバウム朝は辺境の開発を貴族に任せた。

貴族社会というカルテルの中で、共同事業をしたり、利害衝突を回避したりするには首都に居て社交界に出入りしておく方が良い。

そういう訳で地方貴族といっても、多くは帝都に邸宅を構え、そこで地方領からの収入を使つて生活している。

だが、中には変わり者もいる。

地方の領地に下向し、土着してしまう者である。

ゴールデンバウム朝は過去の独裁政権について研究していた。

土着貴族は分国化したり軍閥を作ってしまう事を知っている。

そこで彼等は、白人至上国家としては有り得ないように思える、黄色人種の政権のやり方を模倣した。

250年近く地方領主による反乱を起こさず、平和な時代を築いたトクガワという一族。

そのやり方を模倣し、地方領土着を許可する代わりに留学という形式で妻子は帝都に住ませ、数年に一度は帝都への出仕を命じ、典礼省を介さない貴族同士の婚姻や養子縁組を禁じた。

マリーンドルフ伯爵家が良い例で、本拠地は地方にある惑星で、自領を守る軍隊も

持っているが、妻女は帝都に住まい、伯爵自身も数年おきに新無憂宮に出仕して、特に何かする訳ではないが、皇帝の声のかかる部屋に詰めたりする。

それでも時に地方領主による内乱が発生する辺り、オリジナルの凄さをゴールデンバウム朝の白人至上主義者ですら感じている。

(先年のカストロプ動乱が良い例であろう)

そして宮廷貴族という、一番質の悪い貴族である。

権臣とも呼ばれる。

一応役職は与えられるが、それは肩書の為でしかない。

例えばブラウンシュヴァイク公は、ブラウンシュヴァイク公である事に意味がある。

彼等は皇族と並ぶ帝国の共同統治者であり、国政における意思決定を行う。

彼等が

「今回の戦いは、犠牲者が随分少なかったようだな」

と言えば、それが次の遠征を行う発議に繋がるのだ。

そんな彼等は、意外な事に皇帝の座を狙わない。

既に地球時代に皇帝と呼ばれた君主を上回る広大な領土と富と軍事力を持ち、銀河帝国という巨大国家の国政に口を出せるのだ。

余計な事をして、その特権を剥奪されても意味が無い。

彼等は皇帝になるより、皇帝の後ろ盾になりたがった。

初代皇帝ルドルフ・フォン・ゴールデンバウムも、数多の初代皇帝のように凄まじい功臣肅清をしている。

今に伝わっていないのは、史家がそれを記す事を許されていないからだが、生き残った権臣の家史には抹消された歴史が門外不出の情報として伝えられている。

帝国貴族は建国当初7千家近く立てられたが、現在は4千家を超える程度に減っている。

後継者不在で断絶した家も有るが、多くは余計な事をして取り潰されている。

ルドルフは約1千家を潰したとも言われる。

ここ数年でクロプシュトゥク侯爵家、ベーネミュンデ侯爵家、カストロップ公爵家が廃絶させられ、領地は帝国政府管理として回収された。

好き放題に生きるには分を弁える事を覚える事も重要である。

官僚貴族（帝国政府派）と宮廷貴族（内廷派）はしばし対立するが、地方貴族は自身の立場を守る為に宮廷貴族、つまり国政に口を出せる名門貴族と積極的に繋がる。

不輸不入の権を持つとは言え、隙を見つけては徴税しようとする官僚貴族から富を守る為に、虎の威を借りるのである。

今までキルヒアイスが接收して来た辺境貴族領は、そういう権門と繋がった貴族の領

士であつた。

だが、次に立ちはだかつたのは権門の当主家であり、これまでよりも強力であつた。

過去に地球上の名門貴族として存在した貴族の家名を貰つたシュレスヴィヒ侯爵家は、帝国で五指に入る名門貴族である。

地球時代のシュレスヴィヒ公であるオルデンブルク家、ゴットルプ家及びハダスレウ家との血縁関係は無い。

ルドルフが銀河連邦の軍人であつた時に副官を務め、ルドルフが政界に転じた後は第一秘書として従つたヘンドリクセンを祖先とする。

帝都において宮廷貴族として権勢を振るつていたが、先帝フリードリヒ4世即位前に運命が暗転する。

先帝フリードリヒ4世は、そもそも即位するものとは思われていなかった。

皇太子リヒャルトが至尊の冠を戴くものと思われていたが、彼は弑逆の容疑をかけられ謀殺される。

リヒャルト派であつたシュレスヴィヒ侯爵家も財産を没収され、地方領での謹慎を命じられる。

だがこれは次に皇太子となつたフリードリヒの弟、クレメンツ大公による冤罪であつ

た。

それが分かり、クレメンツ大公の失脚とともにシュレスヴィヒ侯爵家も復活する。財産を返還され、領地も元に戻り帝都に復帰出来たが、皇帝の後ろ盾の地位は失われた。

それでも当時のシュレスヴィヒ侯は、一方的に冤罪を着せられた被害者であつただけでなく、穏やかな性質ゆえに放蕩者のフリードリヒの悪口や侮辱をしていなかった為、フリードリヒの廷臣たちからは同情されていた。

積極的に陰謀に加担し、フリードリヒ大公を「無能」「放蕩者」と嘲笑し軽蔑していたクロプシュトゥック侯が廷臣たちに憎まれ、以後30年以上社交界から追放され冷遇された事と対照的であつた。

長い銀河帝国の歴史で、ブラウンシュヴァイク家やリッテンハイム家も主流派を外れていた時期もある。

彼等は幸運なのか、ジギスムント痴愚帝やアウグスト流血帝の時代に政争に敗れて逼塞していた為、勢力を温存出来ていた。

シュレスヴィヒ家も、歴史上の政争敗者に倣う。

地方の自領に逼塞し、中央の社交界から距離を置く。

一方で妻子は帝都に置き、分を弁えた交流をさせていた。

その甲斐あって、帝国五指の名門貴族の地位を失わずに済む。

リップシュタットの森で、反リヒテンラーデ・ローエングラム連合の盟約が結ばれた時、シユレスヴィヒ侯の世子が当主代行として署名をした。

だがシユレスヴィヒ侯はガイエスブルク要塞への参陣をやらわりと断られる。

シユレスヴィヒ侯も盟主、副盟主と同格の家格であり、どちらかと手を組むとパワーバランスが崩れてしまう。

ブラウンシュヴァイク公とリップテンハイム侯の妥協で、シユレスヴィヒ侯爵家は辺境の防衛を依頼という形で排除されてしまった。

これに腹を立てたシユレスヴィヒ侯は、領土に引き籠り、一切の行動をしなかった。

だが、その間にキルヒアイス別動隊が辺境宙域を攻め始め、二ヶ月でシユレスヴィヒ侯領に迫って来た。

流石に焦りを覚えたシユレスヴィヒ侯は、自身の門閥に属する者を集め、戦力を糾合する。

侯爵家の私兵約5000隻と分家である2つ伯爵家の私兵4000隻、そしてプロの軍人であるヴァルテンベルク予備役上級大将が周辺の帝国軍警備艦隊2000隻を引き連れて参集した。

ヴァルテンベルク上級大将は、第五次イゼルローン要塞攻防戦の時、大将としてイゼ

ルローン要塞駐留艦隊司令官を務めた。

自由惑星同盟軍の名将シトレ提督の作戦、並行追撃によって乱戦に持ち込まれ、敵味方混在状態による要塞主砲封じをされてしまう。

この時、要塞司令官クライスト大將が、味方もろとも敵を撃つ蛮行を行い、帝国軍は勝利を収めるも、両者の間に確執が生じる。

ヴァルテンベルク大將は、下手をしたら自分も要塞主砲「雷神の鎚」でヴァルハラ行きとなっていたかもしれない、クライスト大將の命を狙うまでの恨みを抱いた。

これを問題視した軍務省は、両者を昇進、上級大將とするとともにイゼルローン要塞から離らせ実戦部隊を動かす事の無い閑職に回した。

それでも軍務省要塞管理部名誉部門長クライスト上級大將が怪死した事で、統帥本部長顧問ヴァルテンベルク上級大將が疑われた。

証拠不十分で処罰はされなかったが、ヴァルテンベルクはガルミツシュ要塞司令官に転任させられる。

軍務省の意図を察したヴァルテンベルクは、病氣療養の為の休養を申し出て予備役入りした。

だが彼は、いつか軍の主流に復帰したいと執念を抱いている。

ヴァルテンベルクがラインハルトに味方する事は無い。

軍事系官僚貴族である彼は、自分が苦勞をし、命を脅かされながらやっと上った上級大将の地位を、二十歳にして追い抜き元帥となったラインハルトに好意等抱ける筈も無い。

「あの生意気な金髪の孺子を戦場で倒し、奴が単に皇帝陛下の鼻屑で昇進しただけだと証明してやる」

そう思い、内戦勃発後に引退先を脱して、地方の帝国軍を独自に集めていた。

そしてプロの高級軍人、指揮官級が不在のシュレスヴィヒ侯に売り込んだのだ。

シュレスヴィヒ侯に謁見したヴァルテンブルクは進言する。

「この辺境宙域には、金髪の孺子の子分の赤毛の孺子が攻め寄せています。

奴の戦力は4万隻という大軍で、この星系で戦っても不利です。

しかし、今なら奴は2人の副司令官を切り離して、別方面の制圧に向かわせている為、手元には1万隻程度しか残っていません。

「ここは出撃し、少数の内に赤毛の孺子を討ち果たしましょう」

父のシュレスヴィヒ侯が当時の「放蕩者」フリードリヒ大公の悪口を決して言わなかったように、当代のシュレスヴィヒ侯も礼儀正しい男だった。

「ローエングラム侯は戦争の天才、その腹心たるキルヒアイス提督も決して侮れない手腕の持ち主だ。」

「そのような甘い計算で、果たして勝てるであろうか？」
「これは異な事を申されますな。」

赤毛の孺子の功績は、いずれも4万隻もの大軍を率いてのもの。

4万隻もあれば、あの程度の若造でも負けずにおれましょう。

それに赤毛の孺子にはワーレンとルツツという副将が付けられており、これまでの手際はその2人の中將によるものです。

その2人の中將が不在で、我が軍と同数ならば、決して負けるものではありません」
シュレスヴィヒ侯は大貴族らしく誇り高い、というより傲慢に近い部分も有ったが、
こと軍事においては自信が無かった。

その為、自信満々のこの職業軍人に説得され、全軍を預ける。

シュレスヴィヒ侯の艦隊11000隻はキルヒアイスの駐留するヤルンヴィド星系
に向けて進発する。

途中、ワーレンに敗北したアストウリア伯の敗残部隊、孫のヨハン・オットーや他の
貴族の艦隊も合流し、13000隻に膨れ上がった。

キルヒアイスは既に、配置していた偵察部隊によって、シュレスヴィヒ侯領から進発
した大艦隊を捕捉していた。

更に通信の傍受から、シユレスヴィヒ侯ではなく職業軍人であるヴァルテンベルク上級大将が指揮している事も知る。

「おそらく、ワーレン提督、ルッツ提督が離れている隙を狙ったものでしょう」
キルヒアイスの分析に、幕僚たちも頷く。

「それで、どうされます？」

「両提督を呼び戻しますか？」

「ベルゲングリューン少将、相変わらず卿は敢えて反対の事を言いますね。

今の戦力だけで戦います。

ベルゲングリューン少将、ビューロー少将、ジンツアー少将、ザウケン少将、ブラウヒツチ少将、私には卿たちがいれば十分戦えます。

我々だけでヴァルテンベルク艦隊を撃破しましょう」

「おおーという歓声に紛れて聞き取りにくかったが、ビューローは確かに私を甘く見た報いをくれてやろう……」

とキルヒアイスが呟いていたのを聞いた。

その青い瞳には、普段との穏やかさとは違う光があった。

ヤルンヴイド星域会戦

「臭え、臭え、下級貴族の帝国騎士が、なんでこの幼年学校に居るんだよ」

ラインハルト・フォン・ミューゼルは、上級性8人に囲まれていた。

鋭いアイスブルーの瞳で彼等を睨みつける。

上級生は一瞬怯むも、続けて

「そりや姉が皇帝陛下を色仕掛けで誑かしたからな」

と言おうとした。

色仕掛け……の辺りで言葉は止まる。

金髪の頭突きがその上級生の口に決まり、歯が折れ、鮮血が噴き出した。

それを合図に1対残り7の喧嘩が始まる。

だがすぐにラインハルトには援軍が到着する。

用事で教務課に行っていた赤毛の相棒が駆け付けたのだ。

「なんだお前は」

という短い言葉もまた、最後まで発せられなかった。

キルヒアイスの右アッパーが、相手の下顎の骨を砕いていた。

と同時に別の上級生の鳩尾を、キルヒアイスの肘が下から突き上げる形で貫く。

2人が瞬時に倒され、驚愕した別の上級生の顔面を掴むと、キルヒアイスは足払いもかけてレンガ造りの校舎の壁に叩きつけた。

殴りかかって来た別の上級生の拳を紙一重でかわすと、自分の頭を支点にし、その伸びた腕に自分の手を絡めると、迷わずに折る。

ラインハルトが股間を蹴り上げて2人目を倒し、3人目に取り掛かった時、キルヒアイスの足元には5人の上級生が転がっていた。

最後の一人は、ラインハルトが啞然とした隙に、泣きながら逃げ出してしまった。

「キルヒアイス……お前、凶暴だな」

「ラインハルトには言われたくないよ」

この時期、まだ彼は「様」を付けていない。

「決めた。」

俺はキルヒアイスとは喧嘩しない。

「お前の喧嘩は凶悪過ぎる」

「……その持つてる石を捨ててから言ってくれないか」

キルヒアイスは温和で優しい人柄だと周囲から言われる。

だが、一旦戦うとなったら容赦は無い。

その本領は素早い動きと、大打撃を与える攻撃に有った。

帝国暦488年6月末、ガイエスブルク要塞に籠る貴族連合軍の行動が活発になつて来た。

幾つかの艦隊が出撃している。

シャンタウ星域に向かった艦隊には、メルカッツ上級大将の旗艦が確認された。

また別方面では、ラインハルトに味方を申し出た2人の少将の艦隊が、貴族連合軍フアーレンハイト中将の艦隊によつて相次いで撃破され、戦死したという報が入る。

そしてラインハルトの参謀長オーベルシュタイン中将がガイエスブルク要塞に潜入させていた情報員からの報告で、副盟主リツテンハイム侯が5万隻の艦隊を率いて辺境に向かつた事を知る。

「大方、もう皇帝の父親になつた気分ですんぞり返るブラウンシュヴァイクに、リツテンハイムが気分を害し、口論の末、手柄を立てて立場逆転を図つたところだろう」
「御意」

オーベルシュタインが無感情に答える。

「それでキルヒアイスを狙いに行つたか」

「御意。」

リッテンハイム侯は『辺境で鳥無き島の蝙蝠を気取る赤毛の孺子を退治して来る』と豪語していたとの事

ラインハルトは笑う。

「キルヒアイスは鳥無き島の蝙蝠ではない。

鳥を食い殺す有翼竜だ。

あいつは一旦容赦しないと決めたら、オフレツサー並みに凶暴だぞ」

「……………」

「まあ良い。

キルヒアイスにリッテンハイム出撃の情報を送っておけ。

『盟主との確執の挙句、副盟主が家出した』とな」

「御意」

ラインハルトは相変わらず口が悪い。

「敵、キルヒアイス艦隊発見。

第六惑星の衛星軌道上に布陣しています。

戦力、6000から12000隻程度」

「もつと正しく報告しろ」

ヴァルテンベルク上級大将がオペレーターに怒鳴る。

ヤルンヴィド星系に突入したヴァルテンベルク艦隊は長距離レーダーや光学索敵を駆使し、キルヒアイス艦隊を探す。

恒星ヤルンヴィドは、人類の故郷地球が公転する太陽と似たG2V型星（太陽よりやや重い）で、3つのスーパーアース、3つのスーパージュピター、2つのスーパーネプチューンを持つ恒星系である。

第五惑星と第六惑星は輪を持ち、その内第六惑星には土星の百倍という巨大な輪があった。

その輪の近辺に布陣しているキルヒアイス艦隊は、光学探知が難しい。

レーダーも妨害されている為、概算でしか分からない。

「まあ良い。」

惑星の輪を地の利として戦う事は分かった。

素早く接近し、艦載機戦を仕掛ける。

輪が氷の欠片から出来ている為、砲火、ミサイル戦は困難だ。

敵もそのつもりで輪を盾にしているから、裏をかくぞ」

ヴァルテンベルクは第六惑星軌道に進入すると、自分たちも輪に隠れながらキルヒアイス艦隊の想定位置まで移動する。

僅かに透けて見える輪の向こう側には、確かにキルヒアイス艦隊がいた。

「よし、母艦機能を持つ全艦、ワルキューレを発艦させよ」

宇宙母艦は接近戦をするように戦術が変わって以降、高い防御力を持つようになった。

だが、世界で初めて運用された大規模空母機動部隊以来、弱点は変わらずそこにある。艦載機発艦のタイミングが最も弱いという、構造上の弱点が。

弾薬を満載した艦載機を発進させるべく、発進場所に並べ、進路が固定された母艦は、艦載機を格納し、かつ退避行動を取っている時に比べて格段に弱い。

まさにそのタイミングでヴァルテンベルクは、第六惑星のガスの中から出現した艦隊から砲撃を食らい、艦載機とともに母艦機能を持つ艦が爆散する。

「索敵、どうした!」

「何故発見出来なかった?」

「レーダー波の届かぬ深さに潜んでいたようです」

「では何故、奴等は上手いタイミングで我々に攻撃をかけられたのだ?」

「中から外も見えない筈だろう?」

「そう言つてヴァルテンベルクは、敵の目に気づいた。」

自分たちと同じように、輪の向こう側から自分たちの位置が見えていたのだ。

恐らく輪の向こうの敵艦隊は、タイミングを計って、ガス惑星に潜む伏兵に合図を送ったのだろう。

そしてヴァルテンベルク艦隊が攻撃位置につく頃に浮上し、艦載機発艦のタイミングを狙ったのだろう。

「敵艦隊浮上。」

数、多数」

「もつと正確に報告せよ」

「五個の集団が浮上しました。」

それぞれ、およそ2000隻」

「では、1万隻が伏兵として潜んでいたというのか？」

輪の向こうにいる敵艦隊は何だ？」

ロルフ・オットー・ブラウヒツチ少将は2000隻の艦隊で隕石を牽引したり、ダミーバルーンを使ったりして数を偽装していた。

そして敵を第六惑星に引き付ける役割を任された。

もしも敵艦隊が輪の反対側に回り込まず、直接攻撃をかけて来たならば？

彼は戦わずに第六惑星を離れる。

それを敵が追撃し、惑星を離れた後に、彼は輪に仕掛けていたゼツフル粒子発生装置

を起動させ、起爆する。

短時間だが輪には大きな穴が開き、そこからキルヒアイスの本隊が出て敵艦隊の背後を襲う。

彼は元々勇敢さで鳴らした軍人だったが、キルヒアイス艦隊に配属され、偽装工作や機雷原敷設、索敵網構築等の緻密な仕事を任されて来た。

「私は卿の勇敢さを知っています。

だからそれを教える必要は有りません。

卿の仕事の幅を増やせば、きっと卿は色々な場面で使われる将に成長するでしょう。

その時、機会が来たら思う存分勇敢さを発揮し、武勲を立てて下さい。

用意周到さ、緻密さと勇猛果敢さは共存可能なのです」

キルヒアイスによってそう訓示され、これまでに既に八度、主将として敵迎撃部隊との艦隊戦や惑星占領時の陸上戦を経験して来た。

ブラウヒツチのみならず、キルヒアイスの部下で少将級の他五人も同じように作戦を任されて来た。

少将でありながら、二ヶ月で八度ずつの戦闘指揮、それも勝つお膳立ては整えられた上である。

勝ちは経験に繋がり、自信を持たせる。

准将、少将は普通、艦隊指揮官の下で手足となつて働く為、活躍の機会に恵まれない。キルヒアイスはお膳立てこそするが、基本的に派遣軍の将とし、指揮統率を任せる為、彼等の成長速度も速い。

「ベルゲングリューン少将は大胆さと蛮勇を、

ビューロー少将は攻撃における積極さを、

ジンツアー少将は逆に攻撃時でも防御や後退を心掛ける事を、

ザウケン少将は慎重さ、用心深さを、

ブラウヒッチ少将は緻密さと用意周到さを磨けば、一軍の司令官として活躍出来る
す」

こうして鍛えられた少将たちは、キルヒアイス本隊とともに、五指が物を握り潰すかの如くヴァルテンベルク艦隊を包围する。

「何故だ、何故ここまで複数の小規模艦隊を手足のように自在に動かせる？

2000隻程度の艦隊など、少将級の指揮官だろう？

帝国に、こんなに手練れな少将が揃っているとは思わなかった。

居る筈が無いのだ。

居たらあの金髪の孺子が既に中將に引き上げ、己の派閥の一員としただろう」

解釈は誤っていない。

五人の少将はリップシュタット戦役が始まってから急成長したのである。彼等だけではない。

自由裁量で担当方面を任されたワーレンとルッツの2人の中将も、相手がより大規模な伯爵級の貴族で回数はそう多くないが、2人で二十度の戦闘を経験していた。

キルヒアイスのように部下の少将級を分艦隊指揮官としたり、あるいは自ら赴く等様々な形であったが、この両艦隊も急速に戦争慣れした精鋭部隊となる。

自分一人では手が回らない事を知るキルヒアイスが、部下をフルに使うとともに、彼等に経験を積ませ、手柄を立てさせていた。

こうして自由自在に動くキルヒアイス艦隊と惑星の輪に挟まれて包囲下に落ちたヴァルテンベルクは、初期の母艦機能付艦艇の爆発からも立て直す余裕を与えられず、ボロボロにされて降伏した。

アストウリア少将の部隊は、ここでもまた逃げ出す事に成功する。

「提督、敵艦より交信を求めてきています」

「繋いで下さい」

キルヒアイスはヴァルテンベルクの呼びかけに応じる。

「キルヒアイス上級……大将……、貴官に投降する。」

この艦隊はシュレスヴィヒ侯から借りた艦隊。

私の失敗の巻き添えにするには忍び難い。

降伏した部下には寛大な処遇をお願いする」

「分かりました」

「キルヒアイス提督！」

「何でしょう？」

「卿の艦隊に、ルッツ中将、ワーレン中将は居たのか？」

「彼等はこの戦場に戻っていたのか？」

「キルヒアイスは首を横に振り

「私の信頼する部下たちだけで戦いました」

と答えた。

「そうか、何から何まで私の分析は間違っていたようだ……」

「ヴァルテンベルクはそう呟くと

「私にとって、最期の戦いの相手が卿であった事を誇りに思いたい。

これからも負ける事なく、伝説の名将と成られん事を」

「そう言い遣して通信を切った。

そしてヴァルテンベルク上級大将自決の報が旗艦バルバロッサに届いた。

「閣下、閣下を甘く見た報いをくれてやれましたな」

合流早々にビューロー少将が語り掛ける。

「??」

と首を傾げたキルヒアイスにビューローは

「この戦いの前、小官は閣下が小声で呟いていたのを聞きましたよ」と笑う。

「いやあ、聞かれていたのですか、人が悪い」

キルヒアイスも苦笑いする。

「ですが、あれは私の誇りの為に憤慨していたのではないのです」

キルヒアイスは語る。

「私はローエングラム侯の代理人です。」

私を甘く見ているという事は、それはローエングラム侯を甘く見ている事と同じなのです。

ローエングラム侯を侮辱した者を、私は容赦しませんから」

ビューローは

(きつとそうなのだろう)

と思ひ、

(この先、キルヒアイス閣下のみならず、ローエングラム侯を侮辱した者たちは、ただでは済まないだろうな)

と予感した。

その「金髪の孺子」嫌いの最高峰の一人、リッテンハイム侯の艦隊がこちらに向かっているという報が届けられたのは、それからすぐの事であった。

キフオイザー星域会戦

派遣した艦隊が敗北し、ヴァルテンベルク提督も死亡したと知ったシュレスヴィヒ侯爵は、残った数隻の艦で所領を逃げ出した。

アストウリア少将もシュレスヴィヒ侯と同じ場所を目指して落ち延びる。

それはガルミツシュ要塞。

辺境開拓において、かつて貴族たちの駐屯地として活躍した古い軍事施設である。

辺境の惑星を開拓する際、最初に生命維持装置無しで人類が活動出来る環境を作る事になる。

居住出来なければ開拓も出来ない。

惑星改造が完了するまで、貴族や開拓関係者は仮の拠点として使う施設を求めた。

そして、資源採掘用小惑星を幾つか連結し、坑道を居住区に改造したガルミツシュ要塞が建設された。

要塞を構成する小惑星にはまだ鉱物が残っている為、ここで船を造つたり、必要な機材を製作したりして開拓に用いる。

こうして掘り進んだ空間は居住区に改装され、次第にガルミツシュ要塞は多くの人口

を一時收容可能な大要塞に変わる。

やがて辺境開拓も一段落し、ガルミツシユ要塞の鉱物資源も使い果たされた。質実剛健な辺境貴族が多いのは、この地は贅沢する余裕が無いからでもある。

中央の官僚貴族や宮廷貴族に比べ、人格的にも能力的にもまともな人が多いのは、暴君だと生きていけない事情もあつた。

そんな辺境貴族にとつて、ガルミツシユ要塞は高級リゾートホテルのようなものであり、また自分たちの歴史を物語るモニユメントでもあり、古風な宮殿や城郭に宿泊するような感覚で利用されていた。

一応、辺境はまだ宇宙海賊も跋扈する地域である為、警備艦隊が駐留しているが、前線からは遠く、重要度も低い為、ガルミツシユ要塞司令官というのは「上がり」の職となつていた。

貴族出身で、出自は良いが能力的に元帥や上級大将にはなれない者が、老齢で退役間際に名誉職としてガルミツシユ要塞司令官を任じられ、保養に訪れる辺境貴族を出迎える名誉だけはある仕事をしながら軍歴の最後を締め括るのだ。

大将相当職ではあるが、最前線のイゼルローン要塞司令官や、内乱鎮圧の拠点だったガイエスブルク要塞司令官に比べ、有能な軍人が任命される事もなかった。

そんな「ガルミツシユホテル支配人」が、俄かに重要な職に変わつて来た。

「リッテンハイム侯は何時頃か入城されるのか？」

ガルミツシユ要塞司令官リツチエンス大將は慌てている。

シユレスヴィヒ侯等、キルヒアイスに領地を追われた貴族たちが、僅かな艦艇と、数多くの身内と共に逃げて来ている。

元々が大量の人員を收容可能な開拓拠点だけに、それには対応出来ている。

しかし、5万隻もの大艦隊をガルミツシユでは收容出来ない。

軍事上重要度が低く、駐留艦隊は3000隻程度、軍港も1万隻は收容出来ない。

よつて要塞外部に停泊させねばならない。

しかし、問題は相手が大貴族ばかりの軍な事だ。

リッテンハイム侯の旗艦オストマルクは要塞内に入港して貰うにしても、要塞から遠く、敵の攻撃に晒されやすい場所を停泊地に指定された貴族がゴネる事は予想出来る。

それが身分は男爵でも、リッテンハイム侯の血縁なら大変な事になる。

また、貴族たちはシャトルで要塞内へ移動し、そこに宿泊するにせよ、その部屋割、パーティの席次、食事の手配で忙しく動き回る。

部下たちは

「ガルミツシユホテル支配人が、ピーク期間に入って働いてますな。

掻き入れ時だから、しっかりと稼がないと貰える年金が減るな」

と陰口を叩いている。

士気も低く、余り良い職場では無いようだ。

「お呼びでしょうか、司令官」

キルヒアイスは分散して各地の制圧をさせていた、ワーレン、ルッツ両提督を呼び戻した。

キルヒアイスは勝ち易きに勝つ。

如何に軍事的には素人のリッツェンハイム侯とはいえ、5万隻の大艦隊に対して手持ちの1万隻で当たるような楽観論者では無い。

味方の犠牲を減らす意味でも、全軍4万隻を集結させる。

「貴族連合軍副盟主リッツェンハイム侯が、ブラウンシュヴァイク公との確執の挙げ句、こちらに兵を進めて来ました。

その数、およそ5万隻」

「おお、いよいよですか！」

剛毅なワーレンは落ち着いている。

だが、大軍と戦える事で気分が高揚しているのが感じられた。

これまで、辺境貴族としては高位の伯爵級を相手に10度程戦って勝利を積み重ねて

来たが、多くても3000隻を超える程度、そして貴族の私兵用のスペック落ち艦艇相手に14000隻の正規軍を率いて戦ったのだ。

勝つて当然だった。

菌応えがあったのは、往年の名将アストウリア伯くらいである。

それだけに大軍相手の戦いは気持ちが高揚する。

「リッテンハイム軍は今、ガルミツシュ要塞で最後の補給をしています。

我々がすぐに出発するとして、会敵はおそらく此処、

130光年先のキフォイザー星域と予想されます」

強行偵察の結果を踏まえ、ジンツアー少将が説明する。

キルヒアイス別働隊は、三個艦隊の集結を終え、陣形を再編すると整然と進軍を開始した。

ガルミツシュ要塞に入城したリッテンハイム侯は、その傲慢な姿を晒していた。

敗れて逃げ込んだアストウリア伯やシュレスヴィヒ少将を、貴族の面汚し、恥知らずと公衆の面前で罵る。

そして

「孺子を相手にするなら、金髪の方が良かった。

赤毛の子分では不足だが、まあ良い」

と豪語する、貴族たちのパーティで……。

そのパーティでは、敗れた辺境貴族たちには「食事を与えるな」と命じた上で出席させ、何も運ばれて来ないテーブルに立ち寄っては

「見ているが良い、私が帝国貴族の何たるかを、とくと教えて進ぜよう」と説教する。

特に、自分と同じ家格のシユレスヴィヒ侯を見下すのは気分が良いようで、高価なワインを彼の頭にかけてながら

「どうかね？」

少しは脳細胞が活性化したかね？」

と嘲笑った。

敗れた辺境貴族たちは、何も言い返せず、屈辱に耐えている。

名門貴族たちはこうして、楽しい宴を堪能した。

翌日、リッテンハイム軍はキルヒアイス軍を迎え撃つべく出撃した。

場所はガルミツシュ要塞から13、5光年離れたキフオイザー星域。

要塞から離れた場所に停泊していた艦隊から順次出撃。

そこには陣形は無く、家格が低い貴族の艦隊から進発したに過ぎなかった。

リッテンハイム侯はシュレスヴィヒ侯と真逆をやった。

シュレスヴィヒ侯は専門家の軍人の大言壮語によって艦隊を失った。

リッテンハイム侯は、軍人の実質的な指揮で勝ったと言われたくなかった為、中將以上の軍人を連れて来なかった。

彼は上級大将の軍服を纏っている。

先年のクロプシュトゥック侯の反乱鎮圧を指揮したブラウンシュヴァイク公が上級大将から元帥に階級を進めた為、バランスから部下を派遣しただけのリッテンハイム侯も予備役大将から予備役上級大将に進んだ。

直接指揮を執ったブラウンシュヴァイク公より昇進の理由が意味不明なのだが、貴族社会では全く問題視されていない。

「ブラウンシュヴァイク公が元帥なら、リッテンハイム侯は上級大将で良いのではないか。」

帝国の実力者第二位が大将では座りが悪い」

と思うのが貴族社会なのである。

銀河帝国には自由惑星同盟のようなナンバリング艦隊は無いが、18個艦隊相当の正規軍を持っている。

ラインハルトが宇宙艦隊司令長官となり、ミュッケンベルガー元帥が退役した。

ラインハルトはウルリッヒ・ケスラー、ナイトハルト・ミュラーの2人を中将に昇進させ、艦隊司令官に任命した。

だが、彼が司令長官になり、キルヒアイスを副司令長官とした時点では、貴族派の軍務尚書エーレンベルク元帥、統帥本部総長シュタインホフ元帥が健在で、人事の全てはまだ思うようにならない。

11個艦隊は元帥府付と出来たが、残る7人の艦隊司令官はバランス的に貴族派とされた。

即ちメルカッツ、シュターデン、ファーレンハイト、フォーゲル、フレーゲルが艦隊司令官となる。

(フレーゲル男爵はミュッケンベルガー元帥の艦隊を引き継ぎ、旗艦ヴィルヘルミナも譲り受けた)

残り2人はブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯縁者の貴族軍官僚で、これまで軍務省でデスクワークや参謀業務しかしていない人物だったが、急遽司令官に抜擢した。

事実上、ブラウンシュヴァイク公とリッテンハイム侯が指揮する正規艦隊という事になる。

エーレンベルク元帥もシュタインホフ元帥も、「生意気な金髪の孺子」嫌いではあつた

が、軍官僚だけにラインハルトの軍才は認めていた。

このままではブラウンシュヴァイク公、リッテンハイム侯は勝てない。

そこで、なるべく勢力均衡となるよう、人事上の配慮をした。

内戦を長引かせる為ではなく、勢力均衡により内戦を防ぐ為に。

ブラウンシュヴァイク公はまだ、そうして付けられた専門家たる軍人の意見を聞く度量が有ったが、リッテンハイム侯は無視をする。

ひとつには、同志の意見を取り入れれば自分の功となる盟主と、盟主を上回る実績を上げないといつまでも盟主を上回れない副盟主の立場の違いもあった。

リッテンハイム侯は、自派閥の貴族に手柄を独占させるべく、高級軍人を一人も連れずに戦場に來たのである。

キルヒアイスはリッテンハイム軍が整然とした陣形ではなく、大小様々な集団の混成部隊となっているのに気づく。

とある男爵家の艦隊は戦艦20、巡航艦40、駆逐艦80、砲艦10なのだが、その隣に正規軍の宇宙母艦10、防空駆逐艦60が配置されているといった具合で戦理に全く適っていない。

キルヒアイスはその場で作戦指示をする。

ルッツ艦隊は先行、続いて自艦隊の少将たちの分艦隊、ワーレン艦隊は時差をつけて適当なタイミングで戦線参加。

斜線陣を命令した。

経験を積み重ねた提督たちは、その場での指示にすぐ対応する。

キルヒアイスは、ベルゲングリューンを参謀長、補佐官として旗艦バルバロッサに同乗させ、高速巡航艦800隻を抽出して戦闘集団を編成した。

彼我の距離が600万kmに達する前に、リッテンハイム軍前衛が砲撃、キフオイザー星域会戦が始まった。

「ふん、遠いわ。間合いも分からんか」

ルッツが呆れる。

そのまま防御シールドを展開しつつ、差を詰める。

リッテンハイム軍の前衛集団が突出した。

「距離、600万kmです」

「よし、撃てー！」

撃つて来ないルッツ艦隊に対し肉薄しようとしたリッテンハイム軍前衛集団は、有効射程内で砲撃を食らい壊滅する。

それを見た次列集団が怒りに駆られ、有効射程外から砲を乱射しながら突撃して来

る。

ルッツは効かない砲撃をいなしながら、相手が撃ち疲れて一息ついた瞬間に濃密な、有効射程内での砲撃を行い、敵集団を一個ずつ潰していく。

貴族社会とは差別構造で成り立っている。

リッテンハイム侯は、外様の貴族を露骨に差別する。

しかし、差別され侮辱された事をエネルギーに仕事をこなし、それを誉める事で、誇り高い貴族たちを操って来たのも事実である。

今回も同じように、ガルミツシュ要塞で危険な外側に停泊させられ、宴席でも席次の悪かった者に

「悔しければ赤毛の孺子の首を持って来い。」

そうすれば階位を上げるだけでなく、功績次第では我が娘サビーネの夫君、つまり皇配として迎えよう」

と発破をかけていた。

……軍事以外ならまだ良かった。

軍事でこのような「けしかけ」をすると、個々が功を焦ってしまい、統率が取れなくなる。

ルッツ艦隊とキルヒアイス艦隊の一部、合計20000隻に男爵家や子爵家の数百隻

の艦隊が如何に勇敢に突撃しようとも、結果は分かり切っていた。

自分の思う通りに運ばず、イラつき出すリッテンハイム侯。

功を焦り、前衛が崩れる毎に後ろの部隊が連携も無しに前進し、陣形は崩れる。

「今だ」

いつの間にかリッテンハイム軍左翼上方から、キルヒアイス直属艦隊800隻が突撃を掛けて来た。

陣形の穴に入り込み、亀裂を拡大させながら足を止めずに掻き回し、暴れ続ける。

この内に入り込んだ少数の敵を先に撃つべく、艦隊が回頭した時、遅れて進んでいたワーレン艦隊が有効射程に入った。

艦列が乱れた所を、ワーレン、ルッツの39000隻からの砲撃が襲う。

リッテンハイム軍は支離滅裂となった。

そして恐慌状態に陥ったリッテンハイム侯は、味方を捨ててガルミツシュ要塞に向けて逃走する。

だが彼は、進路に邪魔者を見る。

「何だ、あれは？」

「味方の補給部隊です。」

「長期戦に備えて待機していました」

「撃て」

「は？」

「撃てと言っているのが分からんか？」

「ですが、あれは味方……」

「味方なら何故私が逃げるのを……」

（咳払い） 転進しようとするのを邪魔するのか？

いいから、撃て！

撃たぬか！

こうしてキフオイザー星域会戦で最も醜悪な瞬間、リッテンハイム侯の味方殺しが発生した。

「何という事だ……」

自身も下級ながら「フォン」の前置詞を名に持つフォルカー・アクセル・フォン・ビュローは信じられない光景に言葉を失った。

旗艦バルバロッサの艦橋では、キルヒアイスが今までに無い程激怒しているのをベルゲングリューンが感じていた。

表情は無表情に近いのだが、その青い目から、直視し難い怒気と殺気と軽蔑の念が放たれている。

これまで戦つて来た貴族たちは、それなりにまともだった。民に慕われていた者も居た。

部下の命を守つて欲しいと訴えて自決した者も居た。

民を戦いに巻き込むのを嫌う者も居た。

領地を捨てて逃げたシュレスヴィヒ侯も、倉庫を封印し

「願わくば我が領民の為にのみ、我が財貨を使われたし」

と置き手紙をしていった。

リッテンハイム侯は彼等の誰よりも権勢を持つている。

それがこのような、吐き気を催す醜態を晒した。

奴に生きる価値無し。

前線でもまだ戦つていた者も、副盟主を追おうとした者も、この醜態を見た直後に白旗を掲げて投降の意を示す。

同じ「金髪の孺子」嫌いの貴族でも、リッテンハイムの一門ですらも、あそこまでは腐つていなかったようだ。

リッテンハイム軍は戦闘で18000隻を失い、5000隻はガルミツシュ要塞では無い方へ逃走し、24000隻余が降伏、武装解除された。

この大量投降が、リッテンハイム侯逃走の時間稼ぎになつてしまつたのは皮肉である

う。

戦場の始末を終えたキルヒアイスは、全軍に通信を出す。

「騒乱の元凶、リッテンハイムを逃すな。

これよりガルミツシュ要塞を攻める」

言葉遣いの良いキルヒアイスの口から「侯爵」の称号が外れ、リッテンハイムと呼び捨てされていた。

ガルミツシユ要塞攻略戦

ガルミツシユ要塞に逃げ込んだリッテンハイム侯の兵力は3000隻余に減っていた。
た。

減ったが故に、收容能力の低いガルミツシユ要塞に全艦入港出来た。

全艦收容出来たが故に、要塞も籠城戦が可能となった。

だが、外部の味方と連携出来ない孤立した城は脆い。

ガルミツシユ要塞司令官は、ガイエスブルク要塞のブラウンシュヴァイク公なり、軍事部門の責任者メルカッツ提督なりに救援を求めるべくリッテンハイム侯に進言する。

「やめろ！」

リッテンハイム侯はそう怒鳴りつけた。

そしてそれ以上の指示も出さず、かつて辺境開拓を請け負った貴族たちが過ごし、今は憩いの場として使われている一角に籠り、酒を飲み始めた。

「キルヒアイス提督、面会を求めている者がいます。

リッテンハイムに攻撃された輸送艦の生き残りです。

閣下のお役に立てると申しておりますが……」

「通して下さい。」

「会いましょう」

キルヒアイスはそう言って、その者を艦橋に通す。

その男は右腕の肘から下を失っていた。

「コンラート・リンザー大尉であります。」

義手が間に合いませんので、左手で失礼します」

左手で敬礼するその男は、包帯姿で顔色も悪いが、意識ははっきりしているし、思った以上に体力があるようだった。

「私の役に立つとの事ですが？」

無駄な世間話が嫌いそうなるリンザー大尉に、キルヒアイスはいきなり用件を聞く。

「私はリッテンハイム侯が味方を攻撃した事の生き証人です。」

この腕がそれを物語っています。

この事実を要塞内の連中に知らせれば、労せずして要塞を落とせましょう」

キルヒアイスは頷き、そして問う。

「では、もうリッテンハイム侯への忠誠心は無い訳ですね？」

「忠誠心ですか……」

リンザー大尉は苦笑いする。

「美しい言葉です。」

ですが、都合良く使われていると思います。

今度の内戦は、忠誠心というものの価値について、皆が考える良い機会を与えたと思いますよ。

ある種の人間は、部下に忠誠心を要求する資格が無いのだ、という実例を、何万人もの人間が目撃した訳ですからね」

キルヒアイスは黙って聞くと

「それではよろしくお願いします」

と頭を下げた。

『私はリツテンハイム侯率いる艦隊の、輸送艦デューレン8号の副長を務めていたコンラート・リンザー大尉であります。』

デューレン8号は大破し、ローエングラム侯陣営のキルヒアイス艦隊に投降しました。

経緯はご存知でしょうか？

私たち補給艦隊は、敵ではなくリッテンハイム侯から攻撃を受け、多くの者が死んだのです』

このような放送がガルミツシュ要塞に流される。

リンザー大尉は、同じようにリッテンハイム侯に撃たれ、傷つき、それでも生き残った者を連れて来て放送する。

「返せ！ 俺の足を返せ!!」

「リッテンハイム、出て来い！」

仲間の恨みを晴らしてやる！」

「侯爵、同じ貴族なのに、どうしてこのような無体な事をするのですか？」

リッテンハイム侯は要塞内で放送を見る事を禁じるが、兵士たちは隠れて視聴し続ける。

怨嗟の視線が増えているのを感じたリッテンハイム侯は、貴族用の宿舎から逃げるように出て行き、

「籠城戦を指揮する」

と言って指令室に籠ってしまった、多量の酒瓶たちを供として。

そんなリッテンハイム侯にも最期の時が迫る。

「ウェーゼル狙撃兵大隊のラウディッツ中佐！」

リッテンハイム侯にお目にかかりたい！」

「そのような、その汚い恰好では！」

衛兵と何者かの怒鳴り合う声がする。

「汚い？ 汚いだと!？」

これはリッテンハイム侯の為に命懸けで戦い、侯爵が逃げ出した為に死んだ俺の部下だ！」

包帯をした男が、死体を担いでやって来る。

その死体は腰から下が無かった。

「何をしに来た、無礼な奴め……」

叱りつけるも、声に力が無い。

「お前が命を捨ててお守り申し上げたりッテンハイム侯はこの方だ。

忠誠の褒美を頂け！」

そう言うとも男は死体をリッテンハイム侯に投げつける。

リッテンハイム侯は逃げようと身を翻したが、逆にその死体を抱き留め、受け止めるような姿勢になってしまった。

椅子から転げ落ちる侯爵を嘲笑うそのラウディツツ中佐。

「殺せ！ この無礼者を殺せ！」

叫ぶリッテンハイム侯。

衛兵がブラスターをラウディッツ中佐に放つ。

その時既に死を覚悟していたラウディッツ中佐は、ゼツフル粒子を狭い指令室に充満させていた。

旗艦バルバロッサに要塞から降伏勧告受諾の通信が入る。

「投降します。」

リッテンハイム侯も要塞司令官ももうこの世に居ません」

そう通信で伝える男の背後には、崩れ、火災を起こしている部屋が見える。

「あれは指令室です」

リンザー大尉が言う。

「この機を逃してはならない。」

ベルゲングリユーンとビューローに連絡。

直ちに揚陸艦を出して、要塞を占拠せよ、と」

両少将は揚陸艦を発進させ、要塞に陸戦隊を送り込む。

だが、熱や酸による開口処理も、接舷しての装甲擲弾兵突入も不要だった。

港湾がゲートを開けて迎え入れる。

既に要塞内では、兵士による貴族襲撃が始まっていて、様々なブロックで同士討ちが起こっていた。

ベルゲングリューンとビューローは、自軍についた側に援軍を送り、各地を制圧していく。

そしてガルミツシュ要塞全域の占領をキルヒアイスに報告した。

旗艦バルバロッサが入港する。

キルヒアイスが戦後処理にあたる。

要塞内の道案内はリンザー大尉が行う。

ガルミツシュ要塞に逃げ込んでいた辺境貴族は178家約1000人。

占領時に兵士に殺されたりして、200人が命を落とした。

扱いを見れば、その貴族の人となりが見えて来る。

ある貴族は、家族や付き人たちとともに縛られていた。

別の貴族は、手錠はされているが、元部下と思われる兵士が礼をもって接している。

更に別の貴族は、部屋に家族や執事たちとともに軟禁されているが、手錠も縄もかけられず、出入りする時は見張りの兵士が敬礼し、監視と護衛を兼ねて数人付き従っていた。

身内しか味方が居ない者、領民出身の兵士がまだ礼をもって接してくれる者、おそら

くは領民ではなく他家の出身か一般の兵士であつても敬意を示す者と多様である。

キルヒアイスは捕虜としたゴトラント伯を連れて来るよう、ルツツに依頼をした。

ゴトラント伯はリッテンハイム侯の一門である。

連れて来られたゴトラント伯に、キルヒアイスは

「この死体はリッテンハイム侯のだな」

と聞く。

「黒焦げの死体でよく分からん。

だが、この指輪に見覚えはある。

確かに伯父上だ。

……わざわざ私に聞かずとも、科学検査で伯父上の死体と分かっていたのだろう？」

そう言うゴトラント伯に、キルヒアイスは是と言うのではなく、別の事を依頼する。

「では卿に特に頼む。

この者の葬式を出してやって欲しい。

ローエングラム侯や私にとって不？戴天の敵、帝国人民の敵だが、

このようになつた身に対し鞭打つ気にはなれない。

血族の卿が責任者となつて、丁重に葬つてやって欲しい」

「偽善者が……、と言いたい所だが、素直に礼を言おう。」

感謝する。

伯父上の御遺体、預かっても良いのだな」

キルヒアイスは頷く。

キルヒアイスは、確かに屍に鞭打つメンタリテイの持ち主ではない。

だが、無条件に葬儀を許した訳でもない。

帝国ナンバー2の大貴族の死を、親族による葬儀という形で全帝国に示したのだ。

それ以前にはキフオイザー星域会戦での味方殺しも宣伝している為、帝国全土はリツテンハイム一門の消滅、再起不能を知る。

葬儀を終えたゴトラント伯に、キルヒアイスは一門への投降呼びかけを命じる。

「ふん、それが狙いか。

相変わらず金髪の孺子も、貴様も知性が無いな」

この貴族は、捕虜となつてからも言葉遣いを改めない。

「捕虜となり、命の危機が有るからあいつをローエングラム侯と呼ぶのか？

そちらの方がみつともないだろう。

あいつが金髪で、孺子な事に変わりはない。

俺のあいつに対する感情にも変わりはない。

卑屈になつて生き延びるより、節を曲げずに処刑される方が貴族の誉れだ」

と堂々と言い放ち、ラインハルトを崇拜する一般兵の憎悪を買っている。

金髪の孺子呼ばわりをキルヒアイスも嫌っているが、確かに今更卑屈になられても気持ち悪いだけで、相変わらず敵意剥き出しで変わらずに接して来る方が気持ち良い。

許せない感情は有るが、キルヒアイスはこの貴族の舌を止めはしなかった。

「リッテンハイム一門、血縁14家、姻戚6家、主従関係71家。

これら全てに即刻降伏するよう、卿が説得して下さい」

言葉は綺麗だが、明らかに命令である。

ゴトラント伯は笑い、

「やってやるが、期待するなよ、赤毛の子分」

と言い返した。

そして、ゴトラント伯は確かにリッテンハイム一門に投降を呼びかける。

だが、それに応じたのは血縁8家、姻戚4家、主従関係5家だけであった。

意外そうな表情のキルヒアイスに、ゴトラント伯はまた大笑いする。

「ほら見ろ、言わん事じゃない」

「どういう事ですか？」

そんなに、卿の目から見てもリッテンハイム侯は慕われていない、

ただ権勢だけで支配していた男だったのですか？」

やや声を荒げてキルヒアイスが問う。

「貴様は貴族というものを分かっていない」

ゴトラント伯は言う。

「帝国四百年の歴史で、リッテンハイム家も主流でない時期があった。

その時代の強者は異なるものだ。

だから貴族は、その時代の強者に平気で寝返るのだ。

キフオイザーの味方殺しと当主の死、リッテンハイムはもうお終いだ。

親族の私が保証してやるよ。

だから、血縁として遠い者たち程、ブラウンシュヴァイク家か、多分リヒテンラーデ

の爺の所に鞍替えしたのだ」

「……そういうものなのですか？

では、何故ローエングラム侯に降らないのです？

絶対的強者はローエングラム侯でしょう？」

「そんな事は分かっているが、金髪の孺子は投降したって許す気は無かろう？

金髪の孺子是我々の富も誇りも奪い取る敵なのだ。

だからブラウンシュヴァイクの奴に縋るのだ。

敵をやっつけて、我が身を安堵して下さい、とね。

皮肉なものだ。

貴様が伯父上を倒した事で、ブラウンシュヴアイクは帝国最後の希望となったのだ。キルヒアイスには、貴族とはそこまで卑屈なものと思ひも寄らなかつた。

偉そうにふんぞり返っている以上、誇りも相当に高いものと思つていた。

実際、辺境で戦つて来た相手には、程度の差こそあれ、誇り高く生き、誇り高く死ぬ貴族が多い。

目の前のゴトラント伯にしても、決して卑屈では無い。

この先、敵対を止めない貴族たちはブラウンシュヴアイク公を頼つて抵抗を続けるだろう。

リッテンハイム侯を討つても、貴族連合軍の全体の兵力比と同様、辺境の制圧作業もおよそ3分の1を終えたに過ぎない。

まだこれから先も抵抗が予想される。

辺境貴族は領地をしつかり統治し、民の忠誠心を得ている者も多い為、彼等を潰す作業は気が進まない。

覚悟は決めている。

全て潰していこう。

そう思うキルヒアイスだったが、ブラウンシュヴアイク公の自殺手によつて事態は一

気が変わる事になる。

ヴェスターラント

帝国暦488年2月、リップシュタット戦役開戦前、帝都オーデインにて。

捕虜交換式から戻ったキルヒアイスにラインハルトが尋ねる。

「ところで、どんな男であった？ ヤン・ウエンリーとは？」

「はい。」

正直掴みかねております。

恐ろしいほどに自然体で、懐深く、恐らくは今回の作戦も見抜いているかと……」

今回の作戦というのは、貴族連合軍との戦いの間、自由惑星同盟に、ひいてはヤン・ウエンリーに介入させないよう、同盟においても内乱を起こさせるものである。

既に工作人員を、捕虜交換式の派手な式典を煙幕に、同盟内に紛れ込ませている。

「なに？」

では、なぜこちらの策に乗るのか？」

ラインハルトが訝る。

「分かりません。」

何か手を考えているのか、それとも如何なる状況からでも逆転できる自信が有るのか

……。

しかし、その辺りがヤン提督の人となりの深さかと……」

キルヒアイスが続ける。

「いずれにせよ、敵としてこれほど恐ろしい相手を知りません。

しかし……」

「しかし?」

「友とできれば、これに勝るものはないかと……」

「……ヤン・ウエンリーか……」。

会ってみたいものだ」

帝国暦488年8月、ガイエスブルク要塞を包围する宙域にて。

ラインハルトの元に、ブラウンシュヴァイク公が自領・惑星ヴェスターラントに核攻撃を加えるという情報が入る。

ヴェスターラントはキルヒアイスが攻略を担当しているのとは別な領域に存在する。

辺境貴族よりも、門閥貴族の荘園が多いこの領域では、貴族連合軍の旗色の悪さが、機会を有らば支配者に牙を剥く良民ならざる領民にも知られるようになっていた。

ガイエスブルク要塞外会戦でミッターマイヤーの誘引作戦に嵌まり、「宇宙釣り野伏

せり」を食らった貴族連合軍は、既に7割の参加貴族の当主か後継者が戦死し、艦隊もほぼ壊滅していた。

最早方針を見失った盟主ブラウンシュヴァイク公を他所に、軍事責任者メルカッツ上級大將は、ガイエスブルク要塞での籠城戦を選択する。

それしか道は無い。

難攻不落の要塞に籠り、1年でも2年でも粘れば、遠征軍であるローエングラム軍はどこかで講和を求めざるを得ないだろう。

その希望、願望、妄想を抱いてひたすら要塞に籠る。

長期戦に備え、各貴族は自領に物資供出を命じる。

これに領民が反発する。

ブラウンシュヴァイク公の甥で自身は荘官として地方在住であったシャイド男爵が、弾圧を加えながら物資を徴発する。

そして、前年の帝国領侵攻作戦を行った同盟軍と同じ目に遭う。

暴動が発生したのだ。

伯父の為に物資を集めまくったシャイド男爵は、逃げ遅れて暴徒に襲われ、何とか救出されたが瀕死の重傷を負った。

彼が必死で集めた物資を積んだ200隻の輸送艦がガイエスブルク要塞に向かう。

これを察知したラインハルトは拿捕を命じるが、ガイエスブルクからメルカッツ、フアーレンハイト両提督が救出に向かう。

ローエングラム軍の5人の提督率いる艦隊は、名将と言って良い2人の提督率いる艦隊と交戦し、4割を越す被害を与え、しばらく戦闘不能とするも、輸送艦隊は要塞に無事入港させてしまった。

戦力喪失をブラウンシュヴァイク公は詰るが、戦略的にこの場合、艦隊よりも補給物資であり、両提督は目的を果たした。

そうして迎え入れた輸送艦から、瀕死の甥が運ばれて来てブラウンシュヴァイク公は驚いた。

そして事の顛末を告げると、シャイド男爵は息絶える。

ブラウンシュヴァイク公は身内を大事にする。

例え顔を知らない程の遠い親戚であつても、ブラウンシュヴァイクの門閥に属する貴族ならば大切に扱う。

名将ウォルフガング・ミッターマイヤーがラインハルト麾下に入る事になった理由も、規律違反を犯し、ミッターマイヤーに射殺された遠縁の一族の仇を討とうとして彼を幽閉した事であり、ミッターマイヤーを助けようとしたオスカー・フォン・ロイエンタールが当時のミューゼル大将に助力を求めたからであつた。

どんな悪人だろうと、ブラウンシュヴァイク一門ならば問題無い。

ましてシャイド男爵が何をした？

ただ必要な物資を供出させただけではないか！

そのように怒ったブラウンシュヴァイク公は、多くの者の反対を押し切ってヴェスターラントへの核攻撃を命じた。

「そう聞いては捨て置けぬな。

直ちに阻止の為の艦隊を出動させよ」

「お待ち下さい、閣下。

いっそ血迷ったブラウンシュヴァイク奴に攻撃をさせる事です」

オーベルシュタインの言わんとする事をラインハルトは理解した。

門閥貴族の暴虐さを帝国中に示すのだ。

領民の犠牲と引き換えに。

「この内戦が長引けば、もっと多くの犠牲者が出ます。

それを防ぐ為にも、閣下、どうか御決断を」

「ならん」

ラインハルトは怒鳴る。

「長期戦になって、民間人の犠牲者を増やすような作戦を取るとでも思うのか？
奴等はガイエスブルク要塞の中で死ぬ。

要塞など、私には何の脅しにもならん」

「ですが閣下。

力で落とす事は無いにせよ、要塞攻略には時間がかかります。

艦隊を守る母港としての機能を重視したレンテンベルク要塞と違い、

ガイエスブルクは対艦隊戦を意識した設計です。

中世の城郭と近代要塞程の差があります。

無駄な血が流れましょう」

「くどいぞ、オーベルシュタイン。

決めた事だ。

高速艦を抽出し、ヴェスターラントに向かわせろ。

指揮はミッターマイヤーの部下の誰かに任せれば良い。

3時間後までに準備を済ませておくように」

ラインハルトはヴェスターラントを見捨てる気は無かった。

この時は……。

帝国暦488年、宇宙暦797年、自由惑星同盟で発生した内戦「救国軍事会議」によるクーデターは終わりの時を迎えていた。

3月30日、統合作戦本部長クブルスリー大将襲撃事件発生。

4月3日、惑星ネプテイスにて軍の一部による武力蜂起発生。

4月5日、惑星カッフアーで武力叛乱が発生。

4月8日、叛乱勢力が惑星パルメレンドを占拠。

4月10日、武装勢力が惑星シャンプールを占領。

そして4月13日、同盟首都ハイネセンでクーデター派、主要部を制圧する。

ここまではラインハルトの思惑通りであった。

しかし、ラインハルトが最も警戒していたヤン・ウエンリーが出撃すると一転する。

4月26日、ヤン艦隊が惑星シャンプールを解放。

5月中旬、ドーリア星域会戦でクーデター派の第1艦隊をヤン艦隊が撃破。

6月22日、「スタジアムの虐殺」と呼ばれる事件が起こり、クーデター派が孤立。

8月にはハイネセンの位置するバーラト星系外縁部に到達。

そして首都星を守る防空衛星を破壊し、首都を解放したのだ。

ラインハルトはこの報を受けて愕然とした。

予想を遙かに上回る早さなのだ。

現在ラインハルトはまだガイエスブルク要塞を攻略出来ていない。

しかしヤンは、もうクーデターを鎮圧してしまったのだ。

ヤンは、同盟を二分するクーデターが誰の発案か、やはり知っていた。

首都を解放する直前に、全土に向けた放送で暴露した。

恐るべき男だ。

次に予想されるのは報復である。

自国に争乱の火種を撒いた相手に、遠慮するとは考えられない。

確かに同盟の国力を削ぐ事は出来た。

だが、ヤンが陰謀を仕掛けて来たなら、防ぎ切れる自信も無い。

ヤンは自分と同等か、より上の戦略家の可能性がある。

ラインハルトは自分を基準にヤンを測る愚を犯している。

現実のヤンは、陰謀を考える頭脳はあるが、実行する手足は短く、何より手足を動か

す意欲に欠ける。

同盟政府にやれと言われたら分からないが、少なくとも勝手に報復等はしない。

だが、ラインハルトは想像上のヤンに踊らされる。

間抜けな貴族どもに、奇策を吹き込むかもしれない。

あるいはイゼルローン回廊から艦隊を帝国内に入れ、後方を攪乱するかもしれない。キルヒアイスから報告が上がっているラインハルトの政治を堂々と否定する論、あれはもしかしたら既にヤンが、艦隊運用の隙を見て帝国内に流した流言かもしれない。

ヤンの狙いは、帝国の内戦を長期化させて、同盟以上に疲弊させる事だろう。その為に、政治信条の合わない貴族連合と手を組むマキヤベリズムをやつて来るだろう。

ラインハルトは長期戦という選択肢を捨てた。

(こんな決断をしないとならんとは……)

唇を噛んで悔しさを表す。

だが、ひと通り逡巡を終えると、冷静な表情で言った。

「オーベルシュタインに通達。

卿の策を良しとする。

以降の処置は卿に一任する」

その映像は凄まじいものだった。

人間の悪意を形にしたらこうなる、というものだった。

辺境制圧中のキルヒアイス艦隊でも、その映像を見て、多くの者が怒りを表す。

リツテンハイム侯を討ち取った後も、抵抗はやまなかった。

ローエングラム侯の政策を真つ向から否定し、ネガティブな面を強調する流言は収まったが、代わりに

「人民が五百年近く、平和に暮らして来たのは貴族領主の徳の賜物だ」

「ローエングラム侯は戦争を好む。

血を嫌う貴族とは大違いだ」

「ローエングラム侯は今まさに戦争を仕掛けている。

受けて立っただけの貴族が減ぼされる理由があるだろうか？」

というラインハルトの好戦性を訴える流言が飛んでいた。

こうなると、武力制圧は逆効果である。

キルヒアイス、ワーレン、ルッツは慎重に各惑星を説得していた。

それでも、惑星の主権者である貴族領主が

「好戦的な下賤の者たちよ。

そんなに我が領土が欲しいか？

ならば巷で噂されているように力づくで奪え。

我々はその浅ましさをヴァルハラで嘲笑う事にしよう」

等と言つてくると、迂闊には攻撃しづらくなる。

領民が領主の正しさを信じ、領主の為に働くだろう。

そんな状況が一変した。

如何に貴族を庇う論をばら撒こうと、弁解しようが無い残忍さが露わになったのだ。それは、辺境貴族の心すら折つた。

「降伏する。

もう民は私の事を、貴族の情を信じてくれない。

せめて民を戦火に巻き込まぬ為に、卿にこの身を委ねる」

「ブラウンシュヴァイク公の世は有り得ない。

彼に従つて地獄の炎に焼かれるつもりは無い。

きつと領土も何も奪われるだろうが、不名誉を被るよりマシだ。

降伏勧告を受諾する」

「何故ブラウンシュヴァイク公はあのような悪しき事をしたのか。

自ら滅びの坂を駆け下る如き所業ではないか。

いや、卿に言つても詮無き事だな。

もう戦いは終わった、戦いは負けだ。

降るゆえ、この身は好きにするが良い」

「もう駄目だ。

降伏する。

人民裁判にかけられ、民に首を取られて晒されるより、捕虜となる事を選ぶ様々な理由で貴族領主が降伏する。

それを上回る勢いで

「こちら惑星ケルムトの人民蜂起部隊です。

ローエングラム侯の艦隊、応答されたし。

領主を捕らえた。

我々はローエングラム侯に味方したい」

「我々は惑星グリトニル農業協同組合です。

ここを統治するブラウンシユヴァイク公の代官を討ち取りました。

どうか我等の判断をローエングラム侯に伝え、よしなに取り次いで頂きたい」

「ワアたち、惑星ミーミル農協だけんど、ブラウンシユヴァイク公の手下を鋏で打ち殺しちまったけな。

この後どじやしたらいいか分がんねはんで、教えてける」

「惑星ウルズ農協だつぺ。

殿様ふん縛って納屋にぶっこんでおいたべき。

オラほの惑星さ降りて来て連れてってえな」

このように領民蜂起が相次いだ。

貴族の支配体制は瞬く間に崩壊していく。

「……………農協って、強いですね」

キルヒアイスは、蘭の栽培で園芸系の農協に所属している父親を思い出していた。

「何か思われているところ恐縮ですが、

とある貴族が投降し、閣下への面談を求めています。

ガイエスブルク要塞から脱走して来たと申しており、

それがその……聞き捨てならない事を口にしておりまして……」

「聞き捨てならない事？」

「はい、それが……閣下には言いにくいのですが……」

「ビューロー少将、どうぞ、仰って下さい」

「ローエンングラム侯はヴェスターラントに核攻撃が加えられる事を知っていた。

知っていて宣伝の為に見過ごした、そう言っています」

キルヒアイスは、愕然とした。

キルヒアイスは、信じたくなかった。

だが彼は、その貴族と会ってみる事にした。

最終回：悲劇の再会へ

「何度でも言う。

ローエンングラム侯はヴェスターラント核攻撃を知っていた。

知っていて見過ごした」

この男はバーンシュタイン男爵、軍事上の階級は准将で、ガイエスブルク要塞の守備隊長の一人だった。

第四宇宙港とその周囲の砲台、監視塔を管轄していた。

こういう立場の者が目を瞑れば、要塞からの脱走は可能である。

「私がヴェスターラント核攻撃を知って以降、密かに脱出してローエンングラム侯陣営に逃げ込むのを見逃したのは、一人や二人ではない。

ローエンングラム侯が知らなかった等と言わせないぞ」

「だがそれは、欺瞞情報だと思つて信じなかったのではないか？」

キルヒアイスは反論する。

彼はラインハルトを信じたい。

「ではあの映像は何か？」

予め知っていないと撮影出来ない映像だぞ」

「それは……………」

「卿がローエングラム侯に会ったら聞いてみるが良い。

もし『ヴェスタラーント核攻撃を密告して来た敵兵』が居なかつたら疑え。

口封じされたのだろう」

「口封じですか……………」

ところで、准将は何故私のところに逃げて来たのですか？

私はローエングラム侯の忠実な配下。

ローエングラム侯同様口封じするかもしれないし、実際私は卿に他言無用を命じよう

と思っているのだが？」

答えは意外だった。

「私は卿が保護しているハーゼ子爵家とは付き合いがある。

卿がローエングラム侯の腹心なのは先刻承知。

緘口令にも従うし、財産没収も応じよう。

ただ私は、もう疲れたのだ。

ハーゼ家に免じて、身一つで隠居させてくれんか」

図々しい言い分だったが、身分も財産も諦めたという降将をこれ以上追い詰めるのも

忍びない。

許可を出す前にキルヒアイスは質問した。

「卿は、ローエングラム体制は弱者切り捨てだとか、戦争が絶えないという宣伝をして回った男ではないのか？」

答えは

「なんだ、それは？」

「私では無いぞ」

であった。

キルヒアイスを軍人や貴族以上に手こずらせた煽動家が誰かは、すぐに分かる。

その者は自ら出頭して来た。

ベルンハイム男爵と名乗るその男は、あれだけの事を触れて回った男らしからぬ、おどおどした人物だった。

「卿が様々な風説を流布して回ったと？」

「さ、ささささ……左様」

「……誰かの罪を被っているなら仰って下さい。

私は真犯人の方に興味があります」

「うう、う、嘘ではない。

やったのは私だア」

声が上がらずっている。

汗も止まらず、見るからに小人物なのが分かる。

「では卿が真犯人だとして、何故あのような事をしたのですか？」

「私はローエングラム侯に何の恨みも無いし、ブラウンシュヴァイク公やリッテンハイム侯への恩義も無い！」

「はあ……」

「私がローエングラム侯の敵に回ったのは、本気で、民や社会が心配だったからだ。

社会改革は良いが、卿たちは若い、若過ぎる、失敗を知らない。

そういう者がやる改革は、時に性急に過ぎて、多くの落ちこぼれを作る。

それくらいなら貴族社会のぬるま湯の方が良いのだ」

「大した信念です。

では、何故こうして私に膝を屈しているのですか？」

信念を貫けば良いでしょう」

「膝を屈してなどいいない！……です、違います、はい。

あ、あの、ヴェスターラント……、あれを見たら私の信念も揺らぎます。

あれでは貴族社会が良いなどと、言えない……」

「なるほど」

キルヒアイスは頷く。

この男はおどおどしているが、思考は明瞭なようだ。

ラインハルトの改革が性急過ぎれば発生する社会の歪みについて、警告しているのだ。

1割の勝者と、9割の本格的な社会的敗者を作つて没落させるより、皆が平等に貧しい今の方がまだマシという考えなのだ。

そしてそれは、今の門閥貴族では出来ない、帝国初期の貴族や、辺境にはまだ残つていた統治が出来る貴族と違い、今生きている門閥貴族たちは単に社会を食い潰し、気に食わねば破壊するだけの存在だ。

薄々気づいてはいたが、ヴェスターラントの件で完全に心が折れた。

この点、先に中央の門閥貴族の体たらくを知つて、失望をした後に辺境に来て、まだ多少なりとも気骨ある、称賛出来る貴族が残っていると新発見したキルヒアイスと逆であつた。

「それで、投降した後卿はどうしたい？」

「特に有りません。」

犯罪者として投獄されようが恨みません。

ただ、私が唱えた改革の裏面を気にして、弱者を作らないやり方さえして貰えば、私の生きた意味は有ったというものです」

未来を先に言うのと、このベルンハイム男爵はラインハルトに許される。

この後に起こる悲劇の後、ラインハルトの心に変化が生まれ、自分の改革に真つ向から疑問を唱え、まずい部分を主張する者を受け容れる度量が出来たのも幸いする。

これまでラインハルトやアンネローゼに対し、一切口汚い事を言っていなかった事も、新たな権力者陣営の心象を悪くしなかった。

彼は後に宮内尚書に抜擢され、廃止される典礼省の機能も吸収し、没落する貴族について芸術的才能や学術的才能がある者は補助金で救済し、改革派閣僚に対するアンチテーゼの提唱役として生きる事になる。

小心者で、あがり症な所は生涯治らなかつたが。

ヴェスターラントの惨劇は、キルヒアイスにも分かる程ローエングラム陣営に恩恵をもたらしている。

ヴェスターラント以前は、「ローエングラム侯の世は戦乱の世」という風評により、辺境の制圧作業は停滞しかかつていた。

アストウリア伯、シュレスヴィヒ侯爵、そしてリッテンハイム侯の艦隊を破った後、まとまった兵力は消滅したが、その分各惑星に籠って孤立した戦いに転じていた。

それがヴェスターラントの惨劇以降、雪崩を打って各惑星が投降する。

貴族が投降する場合もあれば、その地の領主や莊園の代官を領民が捕縛したり殺害してローエングラム陣営への参加を求める場合もある。

そうした地に代理人を派遣し、自陣営の勢力として組み込む手間は発生したが、3ヶ月はかかると思われた残る辺境宙域の制圧作業が2週間程度に短縮されたのは事実だ。

（確かに効果的だ。

だが私はこんな策は認めたくない）

キルヒアイスはラインハルトがこんな策を使ったと信じたくない。

会って聞いてみよう、会って否定して貰おう。

だが、もしラインハルトが否定しなかったなら？

（確かめてどうするのだ、ジークフリード。

虚報であれば良し。

だが、もし真実であった時、お前自身の正義と、ラインハルト様の正義とが同じもので無くなった時、お前は どうするのだ？

ジークフリード・キルヒアイスよ……)

合流するキルヒアイスが悩んでいる時、合流される主力艦隊では参謀長オーベルシュタイン中将がキルヒアイスを危険視していた。

キルヒアイスの功績が大き過ぎるのだ。

キルヒアイスが単なる軍人であつたなら、難しい事は無い。

功績の機会均等を理由に、ミッターマイヤー、ロイエンタールといった同程度の軍才を持つ提督を使えば、自ずとキルヒアイスだけが突出した状態は無くなる。

更にケンプやメックリンガーといった提督にも功を積ませれば、同格の提督が5人程並び立つ状態を作れる。

だが、キルヒアイスの今度の功は政治的な判断や、経済的な洞察、情報戦への対応等、他の提督では追いつけないようなものだ。

そのセンスは、ベクトルがやや違うが、ローエングラム侯に匹敵する。

同じように政治的な、謀略的な活動が出来るのはローエングラム侯の諸提督の中では他にオスカー・フォン・ロイエンタールがいるが

「あの男は猛禽だ。

籠の中で平和の歌をさえすり暮らせる男ではない」

そう評価している。

軍事以外の実績を積ませるのは、猛禽の翼をたくましくし、爪を鋭く磨き上げるようなものである。

（キルヒアイス提督の個人的な人柄は問題無い。

だが、立場が彼をしてローエングラム侯の敵とする事も有り得る。

軍より退いて貰うか、政治的な事をしないナンバー3に退いてもらうか。

いずれにせよ、今の立場を改めなければなるまい）

オーベルシュタインは暗い考えを巡らし始めた。

辺境宙域では、艦隊が集結していた。

カール・ロベルト・シュタインメッツ少将率いる艦隊は、貴族連合軍の格上のフォーゲル中將の艦隊に苦しめられつつも、最終的には撃破して彼の居る周辺の辺境宙域を手土産にキルヒアイス艦隊に合流する。

「お久しぶりです、シュタインメッツ提督。

卿の働きにローエングラム侯もお喜びです。

中將に昇進という報が入っています」

「恐縮です。」

ところで、ローエングラム侯と言えば閣下のお耳に入りたい話が有るのですが……」
恐らく「あの話」であろう。

キルヒアイスの脳裏に「私が落ち延びさせたのは一人や二人ではない」という言葉が反響する。

「お聞きします。」

どうぞこちらへ」

シュタインメッツと話し、彼も緘口令には同意してくれた。

そして、口封じに殺される可能性を伝えると、シュタインメッツはその情報源を匿うと約束する。

後日談だが、シュタインメッツにこの一件を知らせたヴェスターラント出身の男は、恩義あるシュタインメッツ戦死後に最早思い残す事も無いと、ラインハルトに報復を試み、直接弾劾する事になる。

続いてヘルムート・レンネンキャンプ中将与エルンスト・フォン・アイゼナツハ中將の艦隊が到着した。

レンネンキャンプの担当宙域は、帝都オーデインとガイエスブルク要塞の在る宙域の反対側で、担当体積は大きかった。

苦戦が予想されたが、レンネンキャンプという人物は部下からの信頼が厚く、彼も部下を慈しんだ。

ラインハルトが「金髪の孺子」と侮蔑され、一方で「グリューネワルト伯爵夫人の弟御」の扱いに困って転属させたがる上官も多い中、極めて公平に扱い、ラインハルトの能力を発揮出来るよう取り計らった。

やや視野が狭いという評もあるが、軍人として極めて有能で、それ故彼を慕う部下が集まり、担当宙域の制圧に協力したと聞く。

アイゼナツハは少将として、補給部隊を任されていた。

だが、オーバーシュタインの推薦で中将に昇進し、補給関連の権限が大幅に強化される。

広域化した戦線で物資不足を起こさなかった彼の補給部隊運用能力をオーバーシュタインは「我が軍の蕭何」と評したという。

蕭何とは、古代中国で主君の大軍を補給面で補佐した「歴史上最高の兵站運用者」であり、実戦部隊のアイゼナツハは厳密には宰相である蕭何とは比較出来ないが、それでも辛口のオーバーシュタインにそう言わしめる程評価が高い。

(そのオーベルシュタインこそ、ヴェスターラントの件の黒幕だろう)

キルヒアイスはそう見ている。

冷徹で、多くの民を救う為に少数の民なら平気で犠牲にするあの男がラインハルトに余計な事を吹き込んだのだろう、そうであつて欲しい、キルヒアイスは思うように思っている。

そして、極端に無口で愛想の悪いアイゼナツハを正当に評価し、昇進させるよう進言した事に意外さも感じていた。

この両提督は、ヴェスターラントの虐殺について、ラインハルトがあえて見逃したという噂を全く知らないようだった。

バーンシュタイン男爵が逃がした密告者たちは、どうやら自分たちの居る宙域より先には行っていないようだ。

レンネンカンブと、彼に援軍するよう命じられたアイゼナツハも、ヴェスターラント虐殺の宣伝で恩恵を受けていた。

とても間に合わないと思つていた広大な宙域の制圧作業が、相手の方から投降して来るようになって一気に進捗したのである。

（効率的なのは認める。

だが、それでも……）

キルヒアイスがラインハルトの傍を、こんなに長期間離れたのは、幼年学校以降初めてである。

ラインハルトがどのように悩んだのが、その姿を見ていないし、相談出来る距離にもいなかった。

代わりにキルヒアイスは、貴族の中にも称賛出来る者もいれば、民の弱さ、強さ、したたかさを見て来たし、銀河帝国という社会をより深く知った。

5ヶ月の別離とそれぞれの経験は、2人の価値観を微妙に異なるものに書き換えていた。

それでもキルヒアイスは、ラインハルトが自分と同じであると信じ、彼の元に向かうとしている。

シユタインメツツ、レンネンキャンプ、アイゼナツハも併せて艦隊数約6万隻。

5人の中将を引き連れるナンバー2。

その彼が告げた。

「では、ガイエスブルク要塞に向かしましょう。

ローエングラム侯がお待ちかねです」

そしてリップシュタット戦役は終わり、銀河の半分を、いやもしかしたら銀河系の人類社会全てに影響を与える悲劇の幕が、これより上がろうとしていた。